

社 会 科 教 室

第 1 4 3 号

平成 1 3 年 度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

新しい学校づくりと社会科学習を求めて

香川県小学校教育研究会社会科部会

香川県小学校社会科教育研究会

会 長 古 市 聖 治

21世紀の始まりの今、新学習指導要領完全実施1年後を控え、香川県小学校社会科教育研究会は、平成10年度においては「未来に生きる人間づくりの教育」サブテーマとして～生きる力の育成を図る社会科、総合学習の展開～を研究実践して参りました。その中で、各学校が創意工夫をして特色ある教育を展開することの重要性が指摘され、教育課程の編成と学習内容の厳選、授業研究の在り方等の検討を求めて研究を進めて参りました。

そして、平成11年、12年度は「生きる力の育成」を目指す社会科の基礎・基本を見つめた特色あるカリキュラムの編成、サブテーマとして～社会科基底単元の構想と実践を通して～を2年間探求して参りました。これらの実践から「社会科は何を大切にするのか」を「新教育課程全体の中での位置づけや理念の具現化」という文脈の中で考え、カリキュラムづくり、1年間ごとの具体的な展開やそれをささえる情報・資料の整備にも目を付けた研究を進め、その成果を得ました。そして、本年度13年は、これまでの研究成果や経緯を踏まえ、

- ① より子どもに寄り添う「学びの姿・過程」に沿った研究実践をする。
- ② 教師による、基礎・基本の確かな定着の「評価」、子ども自らによる確かな伸びの「評価」。

- ③ 実践と評価による「基底単元の修正、深化」を課題として、

「教材の見極めによる、自己確立過程の評価」サブテーマとして～社会科基底単位による実践の発展を求めて～を研究していきます。なお、この研究にかかわって、筑波大学教授高野尚好先生から、社会科・楽しく「できる」から「分かる」学習過程の評価、社会科学習の評価についての研究を進めるよう指導・援助をいただきました。

これを受けて、形成過程における自己評価の在り方や学習と指導と評価の一体化等について、常任指導者の池内博先生の全面的な指導のもとに研究を進めて参ります。なお、各郡市の役員、香社研の理事の先生方、そして、香社研会員の皆様のご努力、ご支援をいただき香社研の研究を進めて参りたく存じます。よろしくお願いいたします。

平成12年度 定例研究集会・夏季研究集会 回顧

1 定例研究集会

○ 6月定例会（高松）

- ・ 月 日 6月17日
- ・ 授 業 6年「室町・激動の時代の生活」
- ・ 授業者 岡本 英孝（高・新塩屋町小）
- ・ 提案者 大嶋和彦（高・鶴尾小），葛西 秀樹（高・香西小）
- ・ 指導者 野村 一夫 先生

○ 7月定例会（仲善・丸亀）

- ・ 月 日 7月1日
- ・ 提案者 森 昭二（仲・東部小）
多田 明広（丸・城南小）
- ・ 指導者 金丸 真明 先生

○ 9月定例会（香川・木田）

- ・ 月 日 9月16日
- ・ 提案者 小比賀節子（香・川東小）
小笠原 学（木・白山小）
- ・ 指導者 森 正彦 先生

○ 10月定例会（三豊）

- ・ 月 日 10月21日
- ・ 授 業 5年「これからの工業と環境」
- ・ 授業者 安藤 通（三・上高野小）
- ・ 提案者 高橋 克佳（三・大野原小）
- ・ 指導者 福岡 和信 先生

○ 11月定例会（小豆・大川）

- ・ 月 日 11月18日
- ・ 提案者 植田 貴弘（小・福田小）
山下 博（大・石田小）
- ・ 指導者 池田 孝徳 先生

○ 2月定例会（綾歌・坂出）

- ・ 月 日 2月3日
- ・ 授 業 5年「わたしたちの生活と情報」
- ・ 授業者 真井 孝征（綾・岡田小）
- ・ 提案者 宇山 知昌（綾・西分南小）
- ・ 指導者 川中 祥照 先生

2 夏季研究集会

・ 月 日	7 月 28 日
・ 場 所	坂出市万葉会館
・ 内 容	本部提案, 分科会Ⅰ(各都市の実践発表), 分科会Ⅱ(パネル討議)
・ 指 導	香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 野村 一夫 先生 香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 柴田 英明 先生 香川県教育委員会事務局大川教育事務所 主任指導主事 寺田 文久 先生 香川県教育委員会事務局坂出綾歌教育事務所 主任指導主事 川中 祥照 先生 香川県教育委員会事務局丸亀仲多度教育事務所 主任指導主事 金丸 真明 先生 香川県教育委員会事務局三豊教育事務所 指導主事 福岡 和信 先生
・ 講 演	文部省初等中等教育局教科調査官 北 俊夫 先生

3 定例研究集会・夏季研究集会を振り返って ～成果と課題～

21世紀の新しい教育の創造を目指した学校教育の内容や制度を見直す教育改革の動向を一層見定めて、6月の高松から2月の綾歌・坂出に至るまで、内容の充実した定例研究集会が続いた。

以下、この一年間の足取りを振り返ってみたい。

口火を切った6月の高松集会では、足利義政の時代の幕府の力と地方の守護大名や民衆の力を比べて、農業やまちづくりなどの視点から各地の生活の様子を構成図に表す授業とともに、社会科と総合的な学習の関連についても提案が行われた。

続く7月の仲善・丸亀集会では、仲善社研から6年「天皇よりも権力をもった藤原氏」の実践をもとに、知識の構造化や視点の整理、拡大などから子どもが広い視野に立って判断・意志決定することができる社会科学習について、丸亀社研からは4年「ごみと住みよいくらし」の実践をもとに、立場の違う多様な考えを聞くことで一つの社会事象を多面的に見ることができ、自分なら何ができるか、何をすべきかを広い視野に立って考えることができる、自分づくりの社会科学習について提案発表がなされた。

夏季研究集会では、坂出市万葉会館で、午前中は基底単元実践事例集をもとに各都市で単元づくりにおける基本的な考え方及び、単元・本時の概略・実践事例の紹介が行われた。午後からは、午前中の発表・討議から出てきた課題をもとにパネル討議が行われ、主体的な学習を進める地域学習の進め方や我が国の国土や歴史に対する理解と愛情を深める社会科学習について、その方向性が示された。最後に文部省の北調査官から「新社会科の課題」というテーマでご講演をいただき、新学習指導要領と新教育課程の構想について認識を深めることができた。

9月の香川・木田集会では、香川社研から4年「調べよう！香川県。知らせよう！ふるさと香川のよさ」の実践をもとに、地域の特色を過去、現在からとらえるだけでなく、地域の未来に対する人々の願いまで調べることににより、地域の特色が時代に対応して変化していることをとらえることができるような学習の在り方について、木田社研からは3年「学校のまわりをたんけんして、じまんマップを作ろう」の実践をもとに、社会科の基礎的・基本的な力が高まり、子どもが主体的に創る学習の構想と実践やその支援と評価の在り方について提案発表がなされた。

10月の三豊集会では、水俣病を教訓として現代社会にも現存する価値観を問い直し、関係する人やものを関係図に表していく授業とともに、社会科から総合的な学習へつないでいく単元構想についても提案が行われた。

11月の小豆・大川集会では、小豆社研から3年「まちをたんけんして、人々のくらしをさぐろう」の実践をもとに、わがまち意識をテーマにした課題単元の構想から、地域のよさに気づき、地域を愛することができる児童の育成について、大川社研からは4年「火事からわたしたちのくらしを守るために働いている人たちの工夫や努力を寒川分署新聞にまとめよう」の実践をもとに、体験的な見学やゲストティーチャーの活用を重視した単元構想について提案発表がなされた。

2月の綾歌・坂出集会では、自分たちの学校の新聞づくりやゲストティーチャーの活用を通して、取材、編集、読者へ配布という一連の流れの中で制作者の工夫や努力にふれ、情報化社会に生きる人間の在り方を考える授業が展開された。

今年度もさらなる発展、充実を目指して研究実践を積み重ねていきたい。

平成 1 3 年度の組織

本部役員

	氏 名	学 校 名	〒 学校所在地	学校電話
会 長	古市 聖治	大・長尾小	769-2301 大・長尾町東901-1	0879-52-3181
副会長	大西 孝典	三・豊浜小	769-1602 三・豊浜町大字和田浜1000	0875-52-2029
	関根 建一	高・新塩屋町小	760-0060 高・末広町 5	087-851-2011
	松下 繁美	綾・岡田小	761-2402 綾・綾歌町岡田下217	0877-86-3004
幹 事	吉本 正隆	高・古高松小	761-0104 高・高松町 3 9 8	087-841-9204
	大前 正昭	坂・東部小	762-0007 坂・室町 1 - 1 - 2 1	0877-46-0234
会 計	植松 勝	高・附属高松小	760-0017 高・番町5-1-55	087-861-7108
監 査	山下 清明	仲・満濃南小	766-0023 仲・満濃町大字吉野 7 4	0877-79-2110

顧 問

(歴代会長) 杉岡 茂 神原 萬吉 岩倉 良行 糸川 達
 東原 岩男 柳 清茂 池内 博 岡野 啓
 亀山 信夫 川田 豊弘 亀井 達男 岡田 弘治
 曾根 照正 中田 清 上川 敦生 丸野 忠義

常任指導者 池内 博 岡田 弘治 河津 學 曾根 照正
 上川 敦生

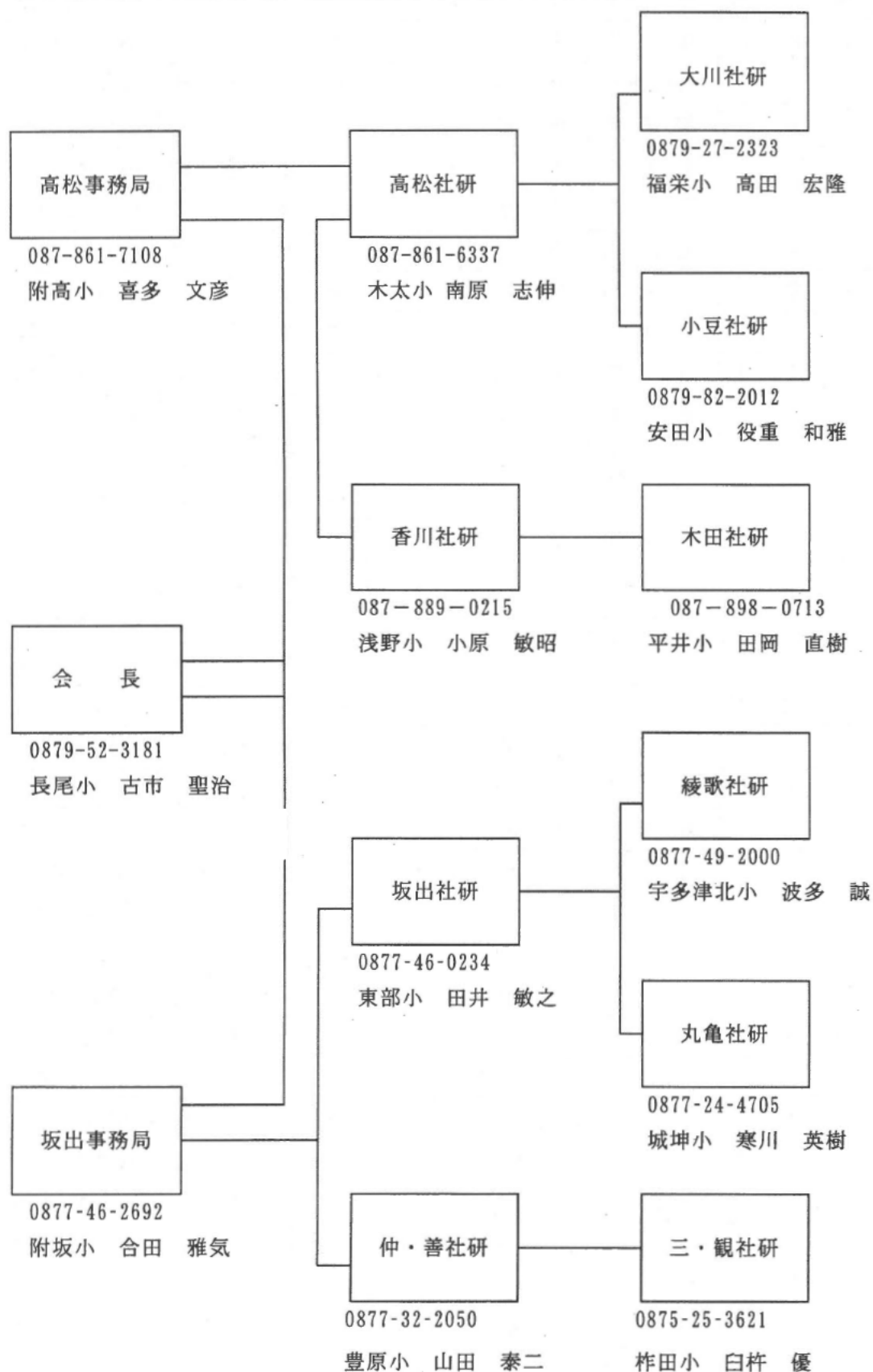
事務局 <総務> 旅田 敏弘 合田 雅気 喜多 文彦
 寺嶋 俊秀 亀井 健男 佐柳 仁

郡 市 理 事 名 簿

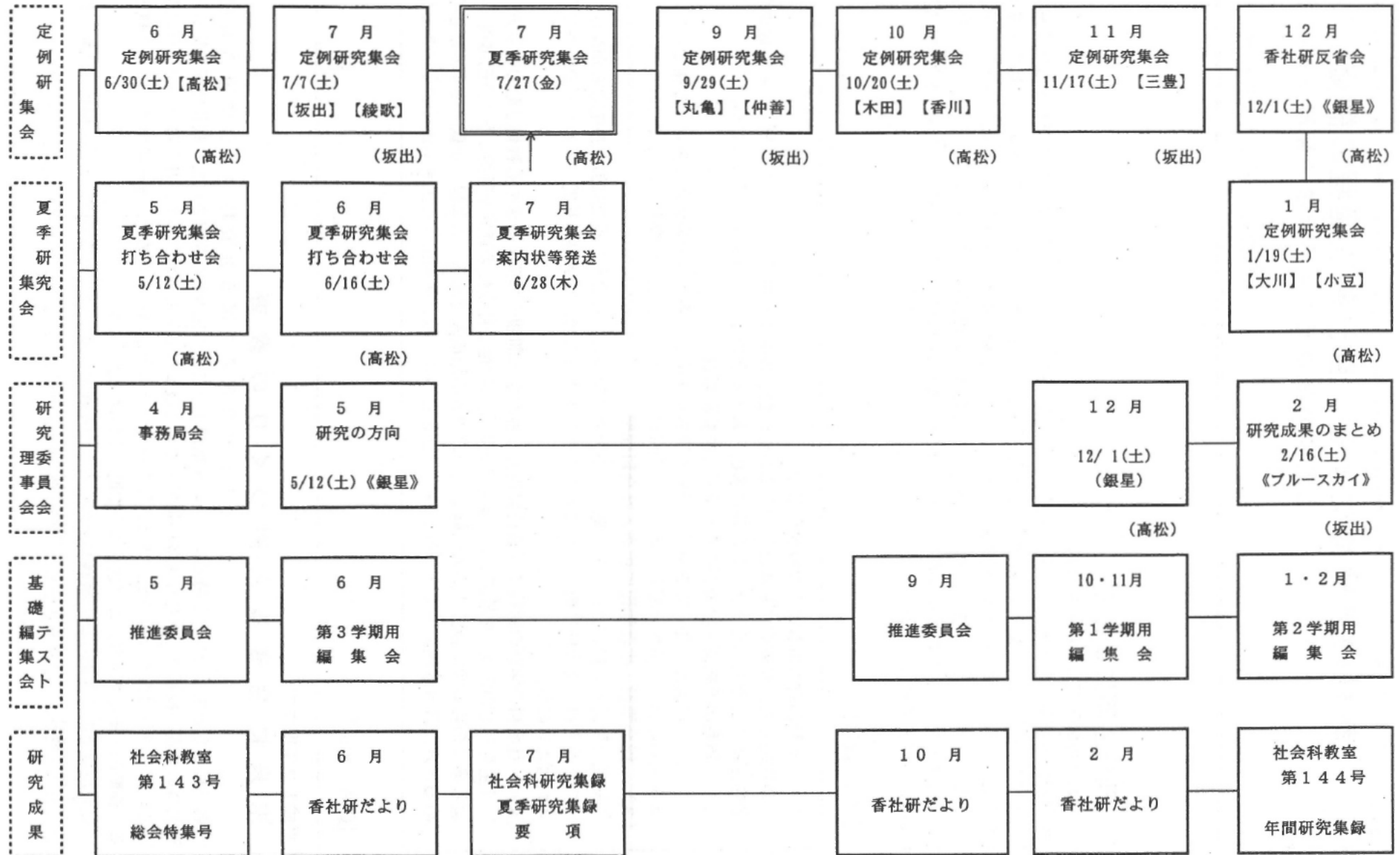
郵便番号	郡 市	町 名	校 名	○	理 事 名	勤 電 話
761-0104	高 松 市	高 松 町	古 高 松 小		吉 本 正 隆	087-841-9204
761-0322	"	前田東町	前 田 小		池 田 孝 徳	087-847-6562
760-0006	"	亀 岡 町	亀 阜 小		徳 田 仁 司	087-861-2013
760-0080	"	木 太 町	木 太 小	○	南 原 志 伸	087-861-6337
760-0061	"	築 地 町	築 地 小		福 家 親 夫	087-831-7188
760-0006	"	亀 岡 町	亀 阜 小		上 井 嘉	087-861-2013
763-0093	丸 亀 市	郡 家 町	郡 家 小		金 山 達 夫	0877-28-8401
763-0051	"	今 津 町	城 坤 小	○	寒 川 英 樹	0877-24-4705
762-0007	坂 出 市	室 町	東 部 小		大 前 正 昭	0877-46-0234
762-0007	"	室 町	東 部 小	○	田 井 敏 之	0877-46-0234
761-4115	小 豆 郡	土 庄 町	戸 形 小		日 向 光 徳	0879-62-0108
761-4411	"	内 海 町	安 田 小	○	役 重 和 雅	0879-82-2012
769-2306	大 川 郡	長 尾 町	多 和 小		八 木 育 夫	0879-56-2002
769-2101	"	志 度 町	志 度 小		三 井 重 彰	087-894-0041
769-2713	"	白 鳥 町	福 栄 小	○	高 田 宏 隆	0879-27-2323
769-2103	"	志 度 町	小 田 小		白 澤 一 修	087-896-0066
761-0822	木 田 郡	三 木 町	神 山 小		藤 原 政 志	087-899-0254
761-0702	"	"	平 井 小		田 岡 直 樹	087-898-0713
761-3110	香 川 郡	直 島 町	直 島 小		鴨 井 俊 徳	087-892-3007
761-1404	"	香 南 町	香 南 小		野 崎 恭 一	087-879-2269
761-1703	"	香 川 町	浅 野 小	○	小 原 敏 昭	087-889-0215
761-1703	"	"	"		川 村 千 寿	087-889-0215
761-1701	"	"	大 野 小		小比賀 節 子	087-885-2165
761-1706	"	"	川 東 小		喜 岡 永 光	087-879-2012
761-2402	綾 歌 郡	綾 歌 町	岡 田 小		松 下 繁 美	0877-86-3004
769-0208	"	宇多津町	宇多津北小	○	波 多 誠	0877-49-2000
769-0103	"	国分寺町	国分寺南部小	○	田 中 直 樹	087-874-1160
766-0023	仲 多 度 郡	満 濃 町	満 濃 南 小		山 下 清 明	0877-79-2110
764-0026	"	多度津町	豊 原 小	○	山 田 泰 二	0877-32-2050
764-0032	"	"	四 箇 小		森 井 信 一	0877-32-2517
769-1602	三 豊 郡	豊 浜 町	豊 浜 小		大 西 孝 典	0875-52-2029
769-1504	"	豊 中 町	上 高 野 小		西 谷 則 一	0875-62-2064
768-0040	観 音 寺 市	柞 田 町	柞 田 小	○	白 杵 優	0875-25-3621
769-1611	三 豊 郡	大野原町	大 野 原 小		高 橋 克 佳	0875-54-2029

連絡網

香社研連絡網



平成13年度の年間計画



教材の見極めによる、自己確立過程の評価

～社会科基底単元による実践の発展を求めて～

香川県小学校社会科教育研究会

Ⅰ 研究主題について

1 これまでの研究の経緯を振り返って

新学習指導要領完全実施を1年後に控え、確かな歩みのある、より子どもたちに寄り添った実践的な研究が求められている。「豊かな人間性や社会性の育成」、「自ら学び、考える力の育成」、「基礎・基本の確実な定着と、個性を生かす」、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開」をねらいとし、子どもに「生きる力」と「ゆとり」をとの提言を踏まえたこの新教育課程の中で、社会科学習をどのように展開していけばよいのか。このことを求めてきたここ数年の香社研の研究課題とこれまでの歩みを簡単に整理し、本年度の研究主題につなごう。

【研究の課題】

(1) 教科固有の本質に立つ社会科学習

時間的にも、精神的にもゆとりのある教育活動を展開する中で、じっくり学習し、その確実な定着を図ることを求めるとき、社会科の基礎・基本をどのように設定すればよいのか。

(2) 特色ある教育・学校づくりを進める社会科学習

点としての実践の在り方を越え、新教育課程が求める「各学校の特色ある教育」の核としての展開を求めるとき、領域と配列を考えた社会科のカリキュラムをどう創り上げればよいのか。

(3) 総合学習・生涯学習に生きる社会科学習

知識と生活との結びつき、知の総合化の視点を重視し、社会科で得た知識や技能などが生活において生かされ、総合的に働くようにすることを求めるとき、社会科の基礎・基本をどのようにとらえればよいのか。

(4) 社会科の学びの過程で「自己実現」、「豊かな人間観の形成」を求める教育活動の在り方

「生きる力の育成」を基調とし、調和のとれた人間性や社会性の育成を目指した「自己実現」や、より多くの可能性で自分や他人を観ることのできる枠組みである「人間観」を豊かにすることを求めるとき、教育課程の中でどう社会科の学びをとらえ、教育活動全体に生きて働くようにするか。

【研究の歩み】

平成10年度まで

未来に生きる人間づくりの教育

－生きる力の育成を図る社会科・総合学習の展開－

各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開することの重要性が指摘された。教育課程の編成と学習内容の厳選、授業研究の在り方等の検討を求める改革が必要とされる中で、社会科はどのように変わっていかなければならないのか。また、社会科学習とのかかわりを含めて、今後の学校づくりの核となる「横断的・総合的学習」の実践をどう推進していけばよいのか。

教育現場での具体的な研究実践が求められている課題に基づいて、この研究テーマ掲げ、教育の新たな枠組みを構築し、今後を見通した実践の姿を追究した。

平成11年・12年度

「生きる力の育成」を目指す

社会科の基礎・基本を見つめた特色あるカリキュラムの編成

～社会科基底単元の構想と実践を通して～

「香川県下のどの学校もが、社会科学習の教育課程を編成するにあたり、社会科単元の基底として活用する」を目的に社会科基底単元を構想・実践した。各地域がその研究の視点や力点を定めつつも、交流の土俵を社会科基底単元に同じくすることで、全小社研の成果を広げ、深めようと考えたのである。

「社会科は何を大切にするのか」を「新教育課程全体の中での位置づけや理念の具現化」という文脈の中で考え、カリキュラムづくり、1時間ごとの具体的な展開やそれを支える情報・資料の整備にも目を付けた研究を進め、その成果を実践事例集にまとめた。

以上のように、課題を確認し歩みを振り返ったとき、研究の大きな流れは、「新教育課程全体の中での社会科の位置づけ」という枠組みから、基底案をもとにした「カリキュラム・具体的な展開・資料」といった指導計画づくりへと進んできたと言える。

本年度は、これまでの研究の成果や経緯を踏まえ、

- ① より子どもに寄り添う、「学びの姿・過程」に沿った研究実践
- ② 教師による基礎・基本の確かな定着の「評価」、子ども自らによる確かな伸びの「評価」
- ③ 実践と評価による「基底単元の修正・深化」

を課題として、研究実践を進めていってはどうかと考える。そのようなことから冒頭の

「教材の見極めによる、自己確立過程の評価 ～社会科基底単元による実践の発展を求めて～」をテーマとして提案する。

2 テーマの示す授業像を描く

(1) 具体的な子どもの表現物から

右は、5年単元「スーパーマーケットから農業生産のようすを調べよう」の学習で、ある子どもが書いたまとめの文章である。

下線部分は、「この子ども」や「クラスの子どもたち」が調べをして協定・共有化した情報・事実（基礎・基本の事項）である。この子どもは、「決まった市場にしか出荷していない」の事項を自分の文脈の中に入れて生産地との信頼関係という結論を導いていく。そのために、さらに市場と生産者の努力を関係づけてとらえ、信頼関係という考えの根拠として結びつけている。

こうして、自分や友達が調べた事項を「思考と表現」の場を通して吟味・解釈し、「自分なりに」関係・意味づけながら全体として「自分らしさ」を確認できる内容（基礎・基本の内容）に高めていっているのである。

「売れる野菜をつくるために、きゅうりをきまった市場にしか出荷していないのは、生産地と市場が、おたがいに信らいしあっているからです。市場では、高くても全部売れるようにしているし、生産者の方では、前日と同じくらい出荷できるようにしています。こうしておくと、生産者が安心して野菜がつかれます。そのために、消費者の好みにあわせる工夫をしたり、市場に行き、宣伝をしているのです。」

(2) 自己確立過程

どの子にも、前述の例のような「自分なりに創り上げた」「自分らしさを確認できる」内容を見いだすことのできる「学習過程」を構想できるようにする。その学習過程を自らあるいは友達や教師により「評価」する中で、自分を主体として学ぶことの楽しさや喜びを感じ得し、自己意識を高められるようにしたい。これを今後の社会科学習で目指す授業像として設定する。そして、この一連を「自己確立過程」と呼びたい。

(3) 教材の見極め

前述のように具体をもってみると、「自分なりに」関係・意味づけた「自分らしさ」を確認できる基礎・基本の内容は、確かな基礎・基本の事項に支えられながら、子ども自らがつくりあげていくものと理解できよう。貧弱な「事項」からは、豊かな「内容」が生まれてこようはずがない。画一的な事項からは自分らしい内容をつくることは難しい。また、その事項を取り入れて自分なりの論に高めていく学習方法にも多様性があることが、自己確立過程をより確かなものにしていく。

そういった自分らしい内容をつくる、多様な学習方法を生み出す「教材」とはいかなるものかを「見極めていく」。基礎・基本をどのように考えるかに立脚しつつ、こういった研究実践を本テーマは内包しているのである。

まとめてみると、

①自らの学びの道筋である「自己確立過程」を、自分らしさを認めながら「評価」できるためには、

②どんな教材を選び（精選と多様化）、開発（メディアと加工）し、見極めればよいか。

が、このテーマの示しているものなのである。

3 背景となる学習観の転換

以上のように研究テーマを設定し、その目指す授業像を描こうとする背景には、知識を授けようとしてきたことから、「生きる力」の育成を柱にすえた、学びの主体育成を目指す「学校知」へと変革していきたいという思いがある。

【学習主体としての子ども】

上から与えられた学習内容は、それがいかに整然と体系化されようとも、いやそうすればするほど学ぶことの意欲や手応え、あるいは学ぶことの意味を見いだすことの乖離を深めることになる。

本テーマに基づく授業像は、子ども一人一人が自分の世界を創造しようとする学習観を採っている。子ども一人一人が「外から得たものを、ちがった感覚として、ちがった仕方では何か一つのものとしてつかむ」（湯川秀樹「創造の世界」）過程としての学習観である。子どもたちが、自ら得た知識や概念を自分なりの考え方、感じ方で問い直し、知識と現実との関係を問い（意味理解）、自分自身のことも視野に入れながら考えを深めることによって、自分独自の個性やアイデンティティを創造することに価値を置く。

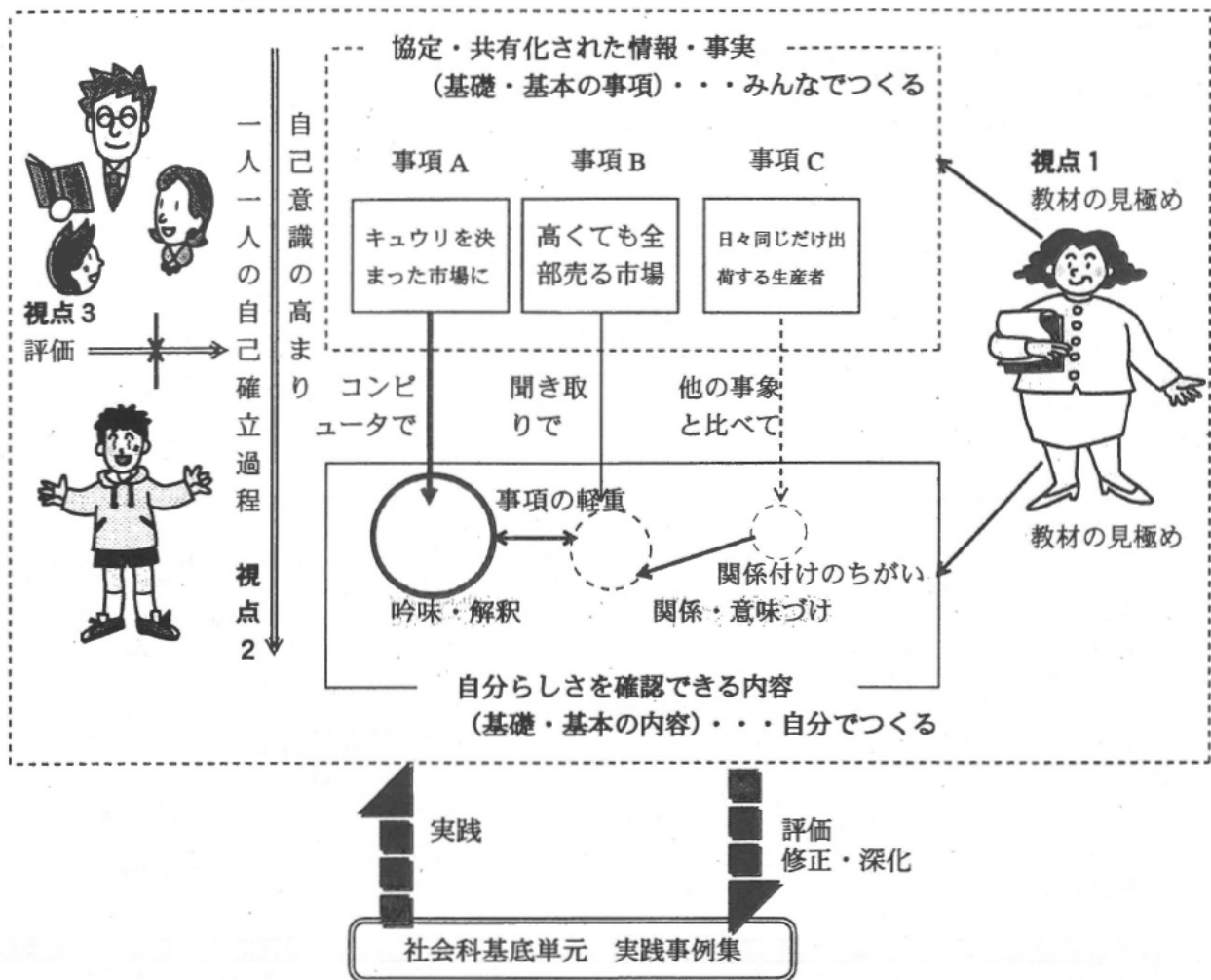
【共同と協同を通す】

最近の学習論では、認知活動は、学習者の置かれた状況に適応しながら進められると言われている。対人関係である社会や文化とのかかわりの中で学習が行われること、あるいは他者の知識と交渉し合う過程で「ワガモノ」としての知識構造をつくりあげられることが強調されている。文化遺産や知識の理解は、社会的交わりを媒介にして、また相互の働きかけによる「共同と協同」を通して深化されて社会的意味を発現させる。知識の習得も単なる私的所有としてではなく、他者と交換し合い、確かめ合い、共感し合うことによって、「ワガモノ」を形作り、生きる力として内在化する。

自己確立過程における他者とのかかわり、「協定・共有化」の大切さがここに表されている。

4 研究実践の視点

以上述べてきた授業像を図化し、同時に研究の視点を提案しておくことにしたい。



【視点1 教材の見極め】

教科書に書かれてあるたった一文の内容でも、子どもたちが理解するには、丹念な地域の調べや残されている歴史資料をさまざまな角度から読むといった豊かな学習を個に応じた展開できるようにしておく必要がある。そのためには、教師が、地域の何を調べればいいのか、どの資料にあたればいいのかという教材研究を深めていかなければならない。

- 子どもたちが多様に考えられる教材
- 深い調べや読みができる教材
- 現代の教育課題の解決に資する教材
- 人間としての生き方に迫っていける教材

「学習方法」
(メディア・開発)

基礎・基本の定着を目指す

- ・様々な角度からの教材の見極め
- ・教材選定の視点を磨く
- ・精選と多様化

【視点2 一人一人の自己確立過程】

教材との出会いによって、子どもの心にわたいた問いを大切ににあたため、確固たる根拠を得たり、友達と交流したりして自分の考えとして練り上げていく「自己確立過程」。体験・実感したことと知識を結び合わせたり、他と比較しながら新しい情報を取り入れて修正したりしながら学習が展開される。

- 典型的な学習過程としてどのような構想をするか。
- 一人一人が自分らしい内容をつくりながら学んでいくとは、どのようなことか。
- 自己確立過程の中に、どう他者とのかわり、対立や同調の繰り返しによる練り上げを位置づけるか。

【視点3 評価】

指導と評価の一体化が強調されている。その上に立って「学習と評価」の一体化も求めていきたい。学習の主体である子どもたちが「自己確立過程」を振り返って、その中に「自分らしさ」を認めたり、自らが有能であること、新たな可能性をもっていることを感じたりできるようにする。教師による基礎・基本の確かな定着の「評価」、子ども自らによる確かな伸びの「評価」を視野に入れた研究実践とする。

- 「指導と評価の一体化」、「学習と評価の一体化」をどのような具体像で実践化するか。
- 「自己確立過程」における評価の観点や方法をどのように設定するか。
- 基礎・基本の確かな定着をどのような手段や方法でとらえて説明するか。

Ⅱ 研究実践にあたっての手がかりとして

1 視点1にかかわって

(1) 真の学力構造から社会科の基礎・基本を考える

① 真の学力構造を人間・能力・知識からみる

教育の新たな枠組みを構築し、今後を見通した実践の姿を追求していく上での前提となる「学力の構造」について、これまで次のようにとらえてきた。以下は、「真の学力を人間・能力・知識からみる」と項目を付け、学力構造について提案してきた内容である。

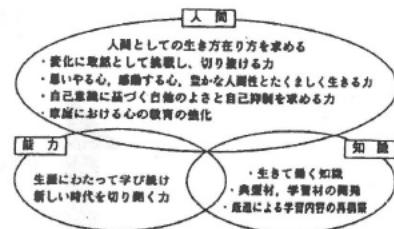
前回の教育課程の改訂で、新しい学力観として、「知識の量的な習得への偏りを修正して、子どもの成長・発達や将来の生活に生きて働く能力（学ぶ意欲・思考力・表現力・判断力）や資質（創造性・豊かな個性）の育成を重視する」という内容が提唱され、その実践が進められてきた。一人一人の学ぶ意欲を大切にしながら、思考力・判断力・表現力などの能力育成を重視してきたのである。社会の変化に主体的に対応できる能力を育成することは、21世紀を生きる子どもにとって必須条件である。

その一方で社会の構成員であり、自らの努力で公民的資質を高めなければならないという面もある。そこで、「真の学力」として、思考力・判断力などの能力育成にとどまらずにそれらの能力を生かして、人間としての生き方・在り方を考える力を求めたい。総合的に生きて働く力としてとらえるのである。単に社会事象を知る、人々の営みが分かるだけでなく、それらのよさが分かり、自分を理解し、社会の構成員としての誇りをもつ。課題に対しては、自ら社会に働きかけられるような姿を重視する。

「真の学力」では、これにさらに知識を加える。知識については、量的な習得への偏りを改めなければならないとしても、知識を軽視してはならない。知識と能力とのかかわりは、能力を育てる知識と、新しい知識を得る能力の二つがある。思考力・表現力などの能力は、子どもの発達を促す内容をもつ知識を媒介として育てられ、新しい知識を獲得していく。そして、その知識が生きて働くものとして、より高次な思考力・表現力などを育てる。

以上、述べてきたことを踏まえ、真の学力の構造を「生きる力」の育成から右図のようにとらえる。

真の学力育成の中核を、人間とする。人間としての生き方・在り方、もっといえば、「自他ともに生き、互いに人間としてのよさを出し合い、認め、高め合う」ことを中核とする。そして、それを支えるものに、能力と知識を考えるのである。



この学力構造をもとに、社会科の基礎・基本もとらえたい。「時間的にも、精神的にもゆとりのある教育活動を展開する中で、じっくり学習する」と示されているが、時間数は、削減されているのが現実である。その中で、何を基礎・基本ととらえるかの視点は、真の学力構造から導かれる「人間としての生き方・在り方」が中核であり、それを支える「学ぶ意欲に支えられた能力」と「生きて働く知識」であろう。何を「基礎・基本」とするかの論議と実践の追求にあたっては、この構造を踏まえながらを前提としたい。

これらは、社会科の本質である「社会認識を深め、国際社会に生きる民主的・平和的な国家・社会の形成者としての公民的資質を育成する」とことと結びつけた「社会認識の内容としての知識・理解」、「社会認識を深める諸能力」、「公民としての社会的態度・能力」と軌を一にするものと考えている。

② 学力構造の中核となる人間を「自己実現」と「人間観」からとらえる

今の子どもたちを取りまく諸問題を念頭に置いたとき、真の人間づくりをどう図るかという課題に「正面から取り組んだ学習論」とそこに立つ授業過程の開発が急務である。そのような趣旨から学力の中核「人間」の鍵となる要件として、「自己実現」と「人間観」を挙げておきたい。

【自己実現】 自分自身に対して働きかけ、それまでになかった何かを、自分自身の上に実現していくことである。そうした何かの実現は、価値的で、人間としての成長・発達として考えられるものである。1時間の授業の最初と最後で、どういう自分について深く認識できるようになったかを見つめていきたい。

【人間観の形成】 人を観る一般的な枠組みのことを指す。人の行為を単一の可能性で見たり、決めつけたりするのではなく、どこまで多くの可能性で観ることができるかと言いかえることもできる。このような「生きる力」としての「人間を見つめる力」を学力の中核としてとらえたい。

(2) 基礎・基本のとらえ方の基調を考える

教育内容を「基礎的・基本的なものに精選する」は、教育課程の改訂のたびに繰り返し強調されてきたことである。今回が3度目になる。精選を「厳選」と言い換えても、その基調がかわらなければ従来の踏襲にすぎず、お題目に終わってしまうことにもつながる。そういった点から、基礎・基本のとらえ方の基調を考えるということで、以下の4点を挙げ、今後の研究・実践の手がかりを示したい。

① 教材・学習材をめぐる

従来、「基礎・基本」の徹底や定着を目指した学習の実践があいまいになってきたのには、各教科において学習の目標とされている「児童が習得すべき教科の基本的な概念や、それらを使用する能力・技能などの『教科内容』」と、これらの学習のために利用される「教材・学習材」との区別がつけられず、混同されていることがあるのではないだろうか。教科内容を減らすことと、教材・学習材を少なくすることと同じと考えられてしまっている傾向がある。

教科内容の厳選と教材とは別の次元の問題である。教材をむやみに削減し、学習材を限定してしまうことは、内容を子どもにとってかえって難しいものにしたり、つまらない無味乾燥なものにしてしまうおそれがある。その定着や見方・考え方の転移を浅いものにしてしまうことも考えられる。

教科内容を厳選することが、一つ一つの内容について学習する時間を十分に確保することにつながるとともに、多様な興味ある教材・学習材を使って分かりやすく内容を説明したり、深い多面的な追求をしたりすることを可能にすると考えたい。

② 基礎・基本の習得をめぐる

基礎・基本は、「繰り返し学習する」ことによって習得されるという考え方に対し、その基調から転換を図りたい。半ば無意識的・自動的に遂行される技能の習得には、「繰り返し学習する」ことが必要ではあるが、より高次の知識の習得には、別の方法が必要である。

基礎・基本の学習と「自ら学び自ら考える」体験的で、課題解決的な学習とが、何か別物のようにとらえられている部分がないだろうか。「表現と操作」に基づく「自らの力で論理的に考え判断する」、「自ら調べ、まとめ、発表する」といった活動は、「基礎・基本」の学習においても必要なことで、これこそが基礎・基本の確実な定着を図る方策だと考えたいのである。

③ 基礎・基本の定着をめぐる

基礎・基本は、子ども一人一人のその後の学習や生活に生きて働く力となったとき、初めて意味をもつ。このように考えたとき、基礎・基本の定着をめぐることは、相対性や多面性、弾力性という点から授業展開を考えることが必要になる。

相対性	基礎・基本とは、何かを支えるものとして意識される必要がある。本時の学習の成立を可能にしていることは、既習のどのようなことであるかが明らかにされて初めて、基礎・基本として働いたことを実感できることとなる。また、そのような体験を重ねることによって、新たに学習したことが次なる学習のどのようなところで、どのように生きて働くのかをつねに意識しながら学習に臨むことができるようになる。
多面性	基礎・基本とは、知識・理解や技能・表現といった狭い部分に限定されるのではなく、思考・判断、関心・意欲・態度を含め、多様な資質や能力ととらえることが大切である。これについては前項で述べたとおりである。何かを「知っている」「分かる」ということも重要である。それとともに、自分で工夫しながら学習活動を発展させたり、自分のもっているよさをフルに使いながら学習を展開するなどという幅広い資質・能力面を授業展開のポイントとしたい。
弾力性	基礎・基本は、言うまでもなく一人一人の子どもに確実に身に付けられ、生きて働くものとなって初めて意味をもつ。ところがこれまで、ともすると一定概念の習得として学習集団のまとめがあり、ここには個の基礎・基本という部分が見えにくいという実態があった。個の基礎・基本の成立の上に、初めて集団における一定の概念の習得があることへの転換が求められる。

2 視点2にかかわって

(1) 知識と経験の統一化 ～「できること」から「分かること」への学びの道筋～

冒頭より子ども一人一人がよい意味での「自分の世界」を創りあげる学習への転換を強調してきた。この学習主体としての子どもを育てるためには、どうしても知識と活動・体験の両者を、学習過程（自己確立過程）のうちに統一化させなければならない。ところが、現在の学びの問題点の一つとして、「体験と知識の分裂」があるといわれている。体験が乏しくなっただけでなく、体験が知的な活動につながって生かされないし、また知的な活動が体験を当てにできなくなったのである。（お茶の水女子大学教授 無藤隆氏による）そこには、あまりにも性急に「分かる」ということを求めすぎた経緯があるのではないかと言われている。

これからの学習指導では、「自分の身体を使って（できる）」活動を、いかに「学び（分かる）」活動に

つないでいくかが求められる。自分が疑問に思ったこと、楽しかったことなど感じたことを、実際に次の学習活動につないでいくという過程そのものを大切にしたいのである。

子どもたちは友達や先生と一緒に対象に進んでかかわる試行錯誤の中から、試すべき自分の考えなり考え方を設定し、対象にかかわり、何事かを追究していく様々な主体的な活動を生み出していく。子どもが自ら興味・関心をもって環境にかかわり、試行錯誤（操作）を経て、環境へのふさわしいかかわり方（基礎・基本）を身につけていくことを学習指導の基本にする。

（２）具体的な学習指導過程

① 子どもが周囲の環境と積極的にかかわり、情動的認知を発達させること・・・かかわる

子どもたちは、日々他人（親、友達、先生など）・もの（自然、社会）・ことばといった様々な環境の中で生活し、親や先生、友達などとの楽しいやりとりを経験して「自分の世界」と「他人の世界」についての情動的認知を発達させていく。

自分が獲得した知識と一緒に話し合う中で、友達に伝え、その友達が次の友達に伝えていく。こうした伝え合いの中で、自らの考えや考え方をつくっていくことができるのである。さらに、友達が学習対象についてどのように追究し、またその状況の中でどう対処し、結果がどうなったかなどを把握することによって、単に自分一人で対象や状況に接するだけでは実現できない幅広い学習が可能になる。

授業では、教師が全員の子どもに一つの学習課題を言って聞かせるという従来までのめあての確認からはじまるのではなく、子ども一人一人が環境とのかかわりを重視し、前時までの学習の中で個々の子どもがもっている課題を大切に、子ども自らが主体的に学習を展開できるようにする。



② 一人一人がさらに調べたいこと、深めたいことを出し合う・・・見つける

友達同士のかかわりの中から、さらに追究してみたい課題などについて出し合う。教師は、それらを集約して学級集団として追究すべき課題にすることが支援の一つとして考えられる。しかし、その根底には必ず「個」の課題意識が位置付いていなければならない。



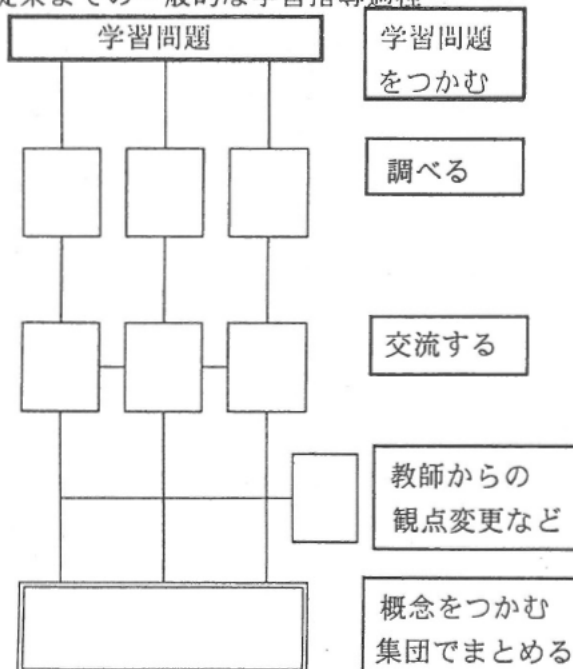
③ 自分の体を使う経験をし、動作的認知を発達させること・・・できる

子どもが知識を獲得する過程においては、実際にそのことを自分の力で試してみたり、工夫したり、変化させてみるなど具体的に操作してみる経験を積むことが欠かせない。子ども自身が、具体的にあれこれと操作しながら、考えることにより「生きて働く知識」として身につけていくものである。言い換えれば、基礎・基本の定着の過程とは、子ども自身が自分の手や身体を通して、外界に働きかけ、それらを実感し納得していく過程そのものである。こうした身体的な実感（動作的認知）こそが、そのことを本当に分かったかどうかを自ら判断する手がかりにつながる。

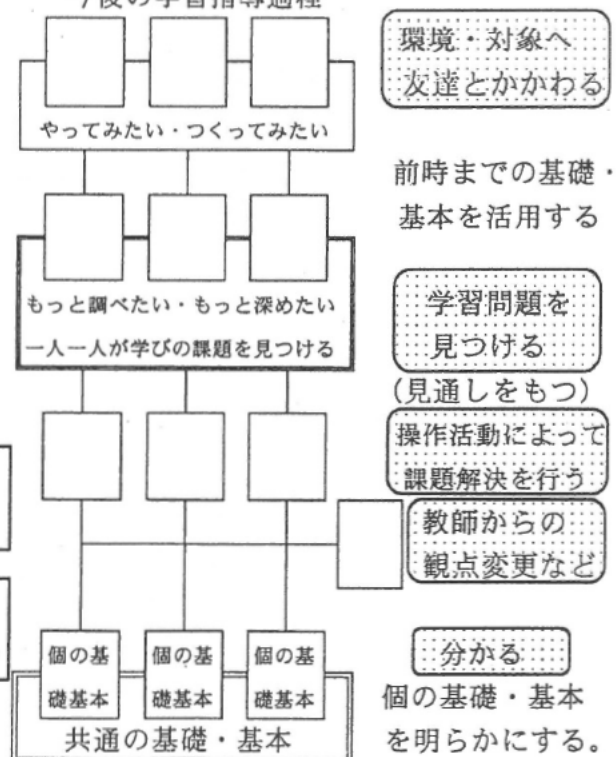


④ 一人一人が基礎・基本を定着できるようにすること・・・分かる

従来までの一般的な学習指導過程



今後の学習指導過程



集団の基礎・基本として、概念をつかむ。

(3)「できること」から「分かること」へ その学びの事例

5年単元 「私たちの生活と食料生産 ー野菜の生産のひみつを土づくりから探ろうー」より

本時の学習

- (1) 目標 野菜づくりに適した土には何か秘密があるのではないかと問いをもち、他の場所の土と比べたり、資料などにあたって情報を得たりする過程(できる)を通して、農家の人の土づくりの工夫や努力を理解する(分かる)とともに、それにかける熱意を感じる(感じる)ことができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	児 童 の 反 応 の 広 が り と 深 ま り	教 師 の 評 価 と 援 助 活 動
1 本時の見通しに対する自分の考えを発表する。	きつと野菜づくりに適した土には、他の土とはちがった秘密があるはずだ。学級園の土は野菜づくりに向いていると言えるだろうか。 <pre> graph TD A[きつと野菜づくりに適した土には、他の土とはちがった秘密があるはずだ。学級園の土は野菜づくりに向いていると言えるだろうか。] --> B[土の成分がちがう] A --> C[水の吸い込み方] A --> D[性質がちがう・・・] </pre>	○ 土の秘密を調べる実験方法を記したカードを「知恵の袋」から取り出し、そのうちの「どの実験を」、「どのような順番で行っていくか」計画する場をもつ。その様子をもとにして、本時の学習への意欲を評価する。
2 自分の考え方に従って、野菜づくりの土と他のものを実験などにより比べて調べる。 (できる)	野菜づくりの土 ⇄ 学級園の土 ⇄ 校庭の土 ⇄ 砂場の土 <pre> graph TD A[野菜づくりの土 ⇄ 学級園の土 ⇄ 校庭の土 ⇄ 砂場の土] --> B[・土をこねる ・地層をつくる ・空気を調べる] A --> C[・保水実験 ・土を熱する ・土性の判定] A --> D[・牛乳を入れ腐らせる ・PHを見る] </pre>	○ 五感を生かして土に取り組んでいく実験を設定する。実感的に楽しく学べるように援助するとともに、そこから生まれてくる「野菜づくりの土」の特徴を新たな問いとして学習問題につなぐ。
3 調べて分かったことからさらに問いを深め、農家の人の土づくりの工夫について調べる。 (できるから新たな課題へ)	やっぱり野菜づくりに向いている土には、秘密があった。きつと野菜づくりに向く土にするために農家の人は工夫しているにちがいない。それを学んで学級園の土も改良しよう。 資料コーナー・インタビューコーナー ○耕し方 ○土の種類 ○改良用土 ○微生物 ○PHを変えるための工夫 ○たい肥と化学肥料のちがい 等	○ 「『野菜づくりの土』のもつ特徴は、農家の人が人為的につくっているのではないか」を個々の問いを集約したものとして学習問題とする。
4 農家の人の土づくりの工夫を「問いと情報をつないで」、「自分らしさ」の認められる考えに高める。 (分かるⅠ)	<pre> graph TD A[成分を変えるために 微生物を増やす 耕し方を変える 客土] --> B[水の吸い込み方を変えるために 客土 丹念に耕す たい肥を入れる] A --> C[性質を変えるために 石灰を入れる たい肥を入れる] </pre> 農家の人は、野菜づくりに適した土にするために細かな配慮をしているんだな。こんなたくさんのことをどのように進めているのだろうか、もっと具体的にみたい。そして私たちの学級園の土も改良できるといいな。	○ 農家の人がどのように土づくりに取り組んでいるかを調べる学習では、次のような過程で個の表現を進める。 ①自分の問いに関係する資料を選ぶ。②資料やインタビューから分かることを緑カード書く。③友達と交流して自分にはない情報を赤カードに書く。④赤と緑のカードを操作して、自分らしい考えをつくる。
5 農家の人の土づくりの実際をビデオなどで見て、自分の考えの確かさと豊かさを評価する。 (分かるⅡ)	岩井市や大野原町での土づくりの様子 船方総合農場での取り組み 複合的・総合的・地域的 農家の人は、野菜づくりに適する土をつくるために工夫や努力をしており、その取り組み方には新しいものも見られる。私たちの学級園にも取り入れられるところを見つけたいな。	○ 土づくりの工夫を文章にまとめる場をもつ。どのカードを使ってまとめたかが分かるように印を付けたり、教師の提示する資料と比べたりすることで達成度を自己評価できるようにする。

3 視点3にかかわって

(1) 新しい学習指導要領の下での評価

新しい学習指導要領のねらいを実現するためには、各学校において、子どもや地域の実態に応じて適切に教育課程を編成・実施するとともに、指導方法の工夫等を行うことが重要である。それに加えて、子どもの学習状況や教育課程の実施状況を適切に評価することもきわめて重要である。

このような観点から、昨年暮れに教育課程審議会より答申が出されたことは記憶に新しい。評価の基本的な考え方として、目標に準拠した評価すなわち「絶対評価」を一層重視し、指導と評価の一体化や評価方法の改善を図るとともに、学校全体としての評価の取り組みを進めるよう方向が示された。

「自己確立過程の評価」という研究テーマとのかかわりも含め、今後の研究実践の手がかりとなるポイントをいくつか示しておきたい。

① 評価の「客観性」と「指導性」

個人内評価、絶対評価、相対評価の三者にはそれぞれに長所と短所が混在している。

◎ 指導的な見地を中心として考えると、教育的な配慮が行き届く反面、教師の主観的な判断に委ねられることになり、評価の客観性が損なわれやすい。

◎ 客観性を中心に考えると、測定的な評価によって客観性が備わる反面、児童生徒の動態的な学びの姿が読みとりにくく、その後の指導の有効性に難点が生じやすくなる。

今回、相対評価をはずし、「絶対評価」に変更したことについては、「到達度を客観的に測る絶対評価」という表現になっている。この点の背景も十分に咀嚼して理解しておく必要があるとともに、教師による基礎・基本の確かな定着の「評価」にあたり、その観点・規準や方法を考える根本としておきたい。

② 指導と評価の一体化 学習と評価の一体化

評価は、ややもするとそれ自体が目的となり、評価のための評価に終わってしまいがちな面が多くみられてきた。その点を考慮すると従来強調されてきたように、評価は指導と一体となるものでなければならない。今回の答申でも「指導に生かす評価をより充実すべきである」とされているとおりである。

本年度のテーマ「教材の見極めによる、自己確立過程の評価」に基づく研究実践は、子ども一人一人がよい意味での「自分の世界」を創りあげる学習への転換、学習主体としての子どもを育てることを求めるものである。その意味から考えると評価の主体に「子どもたち自身」を置き「学習と評価の一体化」を目指すことも肝要になってこよう。

本来、評価とは学習過程の一部をなすものであり、その主体は学習活動の主体と同一であるのが道理である。「生きる力」の育成を至上目標とする新教育課程では、学習活動だけでなくその評価をする主体も子どもにすることということも視野に入れておく必要がある。その際、教師には、子どもが自力で適切な評価を行えるよう、計画的かつ組織的に支援することが求められる。

(2) 「自己確立過程」の評価にあたって

① 学習の過程を重視する～その子の成長のリズムを視野に入れて～

まず、子どもの学びや育ちの状況にある程度のスパンで見取っていく必要がある。そして、学習過程を最大限に重視するとともに、単なる評価要素の総和をみるのではなく、それらの相乗効果を見取っていく動態的な捉え方が必要である。

そのために、子どもの表現物やノートの記事、学びの途中の記録などを十分に活用し、その中に表れた子どものよい点、意欲的な態度、進歩の状況などを丹念に見ていきたい。このような記録の活用によるポート・フォリオ法などの有効性が学校全体の実践として報告されるようになっている。

さらには、もっと長期的に子どもの学びや育ちの状況を見取って、子ども一人一人の成長のリズムの違いを考慮に入れた評価の在り方も研究できよう。「右肩上がり一直線」の発達・成長モデルばかりでなく、ゆるやかな「らせん型」、行きつ戻りつする「ジグザグ型」、「一気集中型」など、一人一人異なる成長のリズムがあると考えたとき、その子の学びへの評価、それに基づく指導・援助は、また異なった展開を見せるであろう。

② 自己との対話を深める

どんな内容知や方法知が習得できているかという状況の評価には、到達度型の評価方法も利用できるが、子どもの問題解決過程や探求過程にかかわる評価、とりわけ子どものよさや可能性に焦点化する評価には、自己評価や相互評価、ポート・フォリオ法などが有効である。

自己評価が利用される理由は、子どもが学習する主体と成長するためには、評価の主体も学習者自身の手に戻していくことが、より教育の論理にかなっているためである。

「生きる力」の育成や自ら学ぶ力の習得にとって、絶えず自己を見つめ、自己を変えていく力すなわち自己評価の能力はその中核であり統合的部分であるといえる。仲間との相互評価は、自己評価の規準設定に役立つだけでなく、他者のよさに気づくことを通して、新たな自己の発見と結びつく。学習の過程（自己確立過程）で、自ら収集し、記述し、保存し視覚化した情報に基づいて子ども自らが、自らの学習活動を評価する観点や方法をさらに開発していきたい。

③ 複数の教師による評価を試みる～「少人数指導」の在り方への提言～

少人数指導にかかわって、複数の教師が協同して子どもたちの指導にあたることが多くなってきた。社会科でも「課題別グループ」、「追究方法別グループ」に分け、教師が「分担して子どもを観る」実践が展開されている。今後もこういった実践の研究を深めていくことが大切と考えている。

ところが、こういった実践を「子ども理解」という評価の視点で見たときに、いくら少人数になってもその子への固定的な見方が変わらなければ、場合によっては「思いこみや決めつけ」による支援が進められていたのではないかと反省することもできる。

今後は、協同的な多面的な子ども理解に立った支援も展開していきたい。具体的には、例えば複数の教師が話し合って、その時間に特にかかわりをもっていく子どもたちを数名決め、活動の様子から見取ったその子たちへの「観」を記録しつつ評価する。授業後、記録を活用しながら、お互いの見方・その子への思いや願いを出し合う。意見の相違に対しては自らの「観」を反省的に見つめ、共通したことに対してはより確かな今後のかかわりへの方針とする。このような子ども理解に立つ「チーム指導」の在り方を求める中で「評価」を考えていきたい。

④ 外部からの評価情報も取り入れる

例えば、地域のくらしの様子の変化や生産や販売に携わる人々の工夫の学習などでは、地域の方々や保護者がアシスタントとして学校に来てくださることが多い。このような場合、地域の人材との打ち合わせ会をもちたいものである。特に事前に評価の観点についても話題として取り上げておくと、授業後にはそれだけ幅のある有効な評価情報を収集することができよう。

とかくこれまでの学校では、「評価」は教師特有の職務と考えられがちで、学校や教師の権威を守ろうとする思いから、今も閉鎖的に考える傾向がないとは言えない。

しかし、「開かれた学校」を一層促進する意味では、思い切って外部からの評価情報を取り入れるようにもしてみたいものである。

Ⅲ 研究実践にあたっての前提として

1 学習内容の厳選による、教材の再構成とカリキュラムの構想 ～基底単元の構想～

(1) 「ゆとり」と「学習内容の厳選」

中教審・教課審の答申の中で、学習内容の厳選の必要性が強調された。自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」の育成を基調とする教育を進めるためには、「ゆとり」のある教育課程を編成することが不可欠であり、どうしても学習内容の厳選を図る必要があるとされた。その具体化の姿としての新指導要領では、単なる知識の伝達や暗記に陥りがちな内容、各学校間学年間・教科間で重複する内容、学校外での活動や将来の社会生活で身に付けることが適当な内容などを削減したり、取り扱いを軽減したりされている。その上で、さらに「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の中で、地域の実態や児童の興味・関心などに応じて、厳選して取り上げるようにすることが強調されている。

この学習内容の厳選は、「不易と流行」を踏まえ、学校で身に付けるべき基礎・基本は何かなどを問いつつ徹底して行うべきであり、特色ある学校づくりを進める地域・学校プランに基づくカリキュラムを編成する上で、新指導要領告示後も、社会科教育の改善にあたって大切な理念となるものである。

(2) 厳選と新社会科の構想

厳選は「ゆとり」を生み出すもとになることから、当然学習内容を削っていく必要がある。と同時にこれまで積み上げてきた総合学習、社会科学学習の成果を基盤に、真に子どもの課題意識と学習内容の高まりを生み出す社会科学学習の基礎・基本に立つ教材を「厳しい目で選び、新たに創り上げていく」過程でもある。学力の構造を踏まえ、「生きる力」を育成する、さらに社会科の基礎・基本からカリキュラムを創っていく立場から、厳選をどのような点から考えてきたか、また、そのことと新社会科の構想とのかかわりについてはどうか、根本としたものをいくつか挙げておきたい。

ア 総合学習とのかかわり

学校課題の解決を図り、学校教育の柱となる総合学習の実践の中にどのように社会科学学習が組み入れられているか。組み入れられていない社会科学学習にどう軽重をかけつつ、子どもの課題意識を大切に展開を考えるか。

イ 教材開発の視点の明確化（別項で詳述する）

「不易」と「流行」を見つめ、社会の変化を見通した学習内容とするには、どのような視点から基礎・基本の内容をとらえ教材開発していけばよいか。また、学年の発達に応じて、視点の関連をどう図るか。

ウ 子どもの認識の系列についての再考

「易から難」、「単純から複雑」、「近から遠」、「旧から新」など、従来の教材配列のもととなる考え方が、常に子どもたちの学びにとってふさわしいものかについて再考する。
農業単元や工業単元といった領域にこだわった単元の在り方も見直す。

エ 小・中、学校外における関連

歴史学習においては、通史を二度行わないという表現が中教審答申などで挙げられている。小学校らしい歴史学習をどう展開するかは、厳選にあたっての大きな課題である。また、完全学校週5日制に向けて、学校外の学習との関連も視野に入れる。

(3) 厳選と新社会科の構想にあたっての基本的な考え方

① 学習内容の選択から社会科の基礎・基本を考える

ア 社会の変化を見通した教材開発の視点の明確化

これからの社会を展望したときに、我が国の社会は様々な面での急速な変化が予期される。それらの変化に対応する教育の在り方が当然模索されるべきである。

反面、教育においては、どんなに社会が変化しようとも「時代を超えて変わらないもの」を大切にしないてはならない。社会の進展の中で「不易」と「流行」を十分に見つめつつ、教材として具現化していくことで、これから生きる子どもたちの生き方や在り方となって身に付いていくであろう。「国際化、情報化、科学技術の進展等の変化」に対応すること、また、「我が国の歴史や伝統への愛情や、豊かな人間性を希求し、人権を尊重する心」を培うということなど、今の教育、また社会科に託された役割から教材開発にあたっては次の五つの視点を大切にしていきたい。

国際化	国際化社会が進展し、世界の中の日本人としての生き方が求められている。広い視野をもち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化をもつ人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ることが必要である。
情報化	様々な情報が氾濫し、マルチメディア時代となる将来、情報を主体的に処理する力が求められている。情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人的な能力、並びに人間関係の希薄化など情報化の陰の部分も勘案できる資質等の育成が求められる。
環境	環境問題については、国内の環境にとどまらず、地球環境の危機としてとらえなければならない状況となっている。学校教育では、かけがえのない国土や地球の環境に目を向け、人間と自然が共存していく地球としていくために具体的な行動をとる子どもの育成が望まれている。
人間化	子どもたちが将来自己実現を図りながら、変化の激しい社会で生きていく上での基準となる生き方の形成が求められる。豊かな人間性、人権意識、正義感や公正さを重んじる心、自己を律しつつ他者と協調するなどの心を尊いと感じることのできるような人間として育てていくことが重視されている。
文化	我が国が形成されてきた歴史、先達が残してくれた芸術、文学、民話、伝承などを学び、これらを大切にしていこうとする心を養うこと。それを現代に生かし、新たな文化の創造者・発信者として生きていこうとする資質の育成が求められる。

イ 人間観を育てていく教材の開発

社会科で目標とされる「内容についての知識（内容知）」や「方法についての知識（方法知）」をもとにして、「人間についての知識」の重視が求められている。社会の変化を見通す教材の視点とともに、生き方や在り方自体がそこに物語られている教材の開発を目指したい。

歴史学習を例にとってみる。いくつかの事象をつないで、時代の特徴やイメージについて、自分なりの考えを創り上げていく。その学習の中に、「その時代を生きた人にも、様々な悩みがありそれを乗り越える工夫や喜びがあったはずである」と、そのような人間の心の入ったドラマが描かれていけば、そこから子どもたちは一人の人間の生き方や在り方を考えていけるはずである。時代をたくましく生きる姿に感動し、自らが生きる血や肉にすることができよう。

学習方法の中で、自分で自分を育てよう、たくさんの友達の中で育てようという姿勢で学習方法を見直すとともに、もっと積極的に人間としての生き方を、感動とともに考えられる教材の開発を視野に入れたい。このことが、学力構造の核であり、社会科の基礎・基本とする人間としての生き方・在り方を、子どもたちに見いださせることにつながると考える。

ウ 基本課題と具体課題

現代の教育課題、また社会科に託された役割から、人間観を育てていくことを含めて教材開発の五つの視点「国際化」「情報化」「環境」「人間化」「文化」を大切にする。これまで社会科の教材を構成する上で軸となってきたものも入れて、社会科の学習内容の選択・厳選による教材の再構成においては、次の四つを「基本課題」として設定したい。「世界の中の日本人」「地球環境にやさしく」「くらしをひらく生産と消費」「地方からの文化発信」である。

この基本課題の求める姿が明確になるように、より分化した課題、「具体課題」も下のように設定する。

「世界の中の日本人」	— 「国際関係と平和の確立」
「地球環境にやさしく」	— 「生命・財産・資源の保護・保全」
	— 「環境の保護・保全」
「くらしをひらく生産と消費」	— 「生活圏の広がりと他地域とのかかわり」
	— 「生産・流通・消費のしくみの変化」
	— 「地域環境と人々の生活」
「地方からの文化発信」	— 「人権の確立と民主政治」
	— 「社会の発展と人間の歩み」

② 子どもが自ら学ぶという点から社会科の基礎・基本を考える

ア 子どもの課題意識の重視

子どもの課題意識は、必ずしも領域の枠のなかに収まるものではない。生きて働くという視点で考える時、課題解決のためには、ますます多様な領域の内容や方法が必要となってくる。領域という枠組みをはずした学習の場が設けられていることが、子どもの学習意欲を高め、知識構造の変容につながる。

今回、教課審の審議のまとめの中で改善の具体的事項として「生産活動と消費生活に関する内容を集約統合」、「・・・運輸の働きについての内容は、農業や工業などの内容に関連」などが求められ、新指導要領でその具体的な姿が示されているのは、枠組みをはずして、子どもの課題意識を重視しようということと対応していると考えたい。子どもたちの課題意識の連続と深まりの上に立ち、思考力と表現力をつけていくためには、領域の枠を越え、学習内容を開く力を発揮できる授業を構想・実践する必要があると考える。それは一つの単元において、じっくりと「ゆとり」をもって課題に取り組むことができ、自らの確かな知識構造の変容を認めていける学習の場でもある。

イ 領域単元から課題単元へ

現在、子どもの学習内容は、教科書どおりの枠組み・構成になりがちな領域単元になっている。この領域単元から課題単元へ移行することを大切にしたい。課題単元とは、単元間の枠、場合によっては学年間の枠を取り払い、一つの課題に向かって子どもの意識が連続しつつ、「基本課題・具体課題」の解決を図るよう構成しようとしたものである。

この課題単元によって、従来の教科書単元が限定してしまう領域的で系統的な内容を子どもの課題や地域・学校の実情・課題に応じた単元構成、さらにはカリキュラムに組み替えることが可能となる。

③ 厳選による教材の再構成 年間計画を含めたカリキュラムづくりという点から

子どもたちが調べたい、学びたいと感じる内容と学び方を大切にするには、時間のゆとりが必要である。しかし、教材のすべてに同様のゆとりをもたせていくことには、難しい部分がある。どうしても、子どもの立場に立った「ゆとりをもたらす」厳選による教材の再構成・年間計画づくりが必要となる。この社会科のカリキュラムづくりにあたっては、教科書を中心として基礎的・基本的な事項や能力を徹底して学習する単元と、それを基にして深めていく部分に区別した単元配列や、教材によっては選択して学習するなど軽重をつけていくことが必要である。教材提示をしてきちんと学べる教材単元、自ら学ぶ学習である課題単元のバランスを大切にしたい年間計画をつくっていく。この教材単元、課題単元については、次項でさらに説明することにする。

(4) 厳選を図るための具体的方策 — 社会科「課題単元」、「教材単元」の実践 —

① 子どもの課題意識と基本課題・具体課題との接点を求める「課題単元」

身近な事例に直にあたり、自ら学び、考えることのできる「創る学習」の展開が今求められている。従来の領域にこだわった教材の構成（領域単元）から、子どもの課題意識に基づいた構成（課題単元）へと転換する。これまで本項で述べてきた厳選の基本的な考え方に立って、カリキュラムづくりの柱をどう置くかの方策については、次のページの図にあるようにまとめているとおりである。

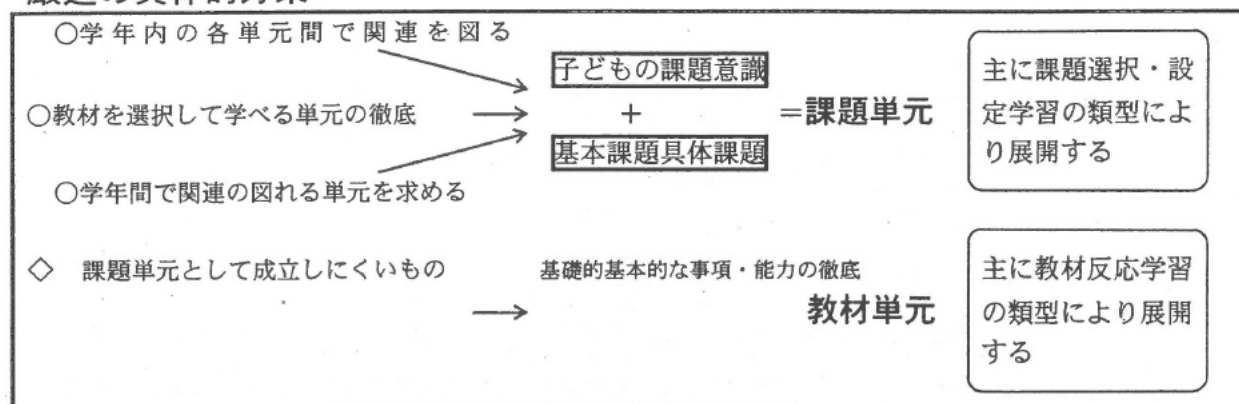
この課題単元づくりにあたっては、「子どもの課題」と、「現代の教育課題などを踏まえた教材開発にあたっての課題」との接点を重んじる。そのことからの内容の再構成を考えると、学年間の関連や選択と同時に、学年を越えて継続的に追究される課題単元も構想されていく。3年生からの課題が4年生に引き継がれるという構想や、3年生から6年生、それぞれにその課題について発展的に学んでいくことも視野に入れて研究を進めていきたい。

② 基礎的・基本的な事項や能力をはぐくむ「教材単元」

課題単元での子どもの豊かな「創る学習」を支えるものが「学び」を重視した教材単元の展開である。この単元では、基礎的・基本的な事項や能力の育成を徹底して行う。地図や資料の正確で有効な読み取り、事項や用語の把握などを図り、きちんと分かることをねらいとする。教師は、子どもの教材への反応を見極め、「個別化」のための支援・援助を行うことを主な役割とする。

以上示した「課題単元」と「教材単元」の組み合わせにより、新社会科を構想し、「社会科の基礎・基本を見つめた特色あるカリキュラムの編成」という研究実践を進めたい。

厳選の具体的方策



(5) 厳選による教材の再構成 「社会科基底単元」の構想

以上、(1)～(4)で述べてきたことをもとに、厳選による教材の再構成をプランとしてどうしているかについて示したい。本部会では、社会科学習の特色あるカリキュラムを編成するにあたり、香川県下のどの学校もが、社会科単元の基底としていただきたいとの願いから「社会科基底単元」を設定している。これは、本会がこれまで研究実践を進めてきた「内容の厳選」と「課題単元構想」を軸に構成しており、香川県の歴史や風土なども考慮に置いて新学習指導要領に準拠しようとしたものである。

本年度までもこれを基底に、各地域・学校の課題に応じ、「生きる力の育成」を理念とした、確かな社会科学習を展開するべく、実践を深め広げてきている。一昨年度、これまでの実践も含めて、「新学習指導要領準拠 社会科基底単元の構想 一内容の厳選と課題単元による展開一」を冊子にまとめた。また、昨年度これを土台に、社会科基底単元実践推進委員会の編集による事例集が発刊された。具体的な実践の姿については、これらを参照していただきたい。

前者の冊子の概要について、以下のように説明をしておく。なお、本提案では、社会科基底単元【単元名一覧】以外は、紙面の都合上その一部分だけを載せておくことにする。

社会科基底単元 一課題単元と教材単元による一 【単元名一覧】

学習内容の厳選による、教材の再構成とカリキュラムの構想にあたって、本県として基底となる単元名の一覧である。これまでの実践の成果や下に挙げた「教材の再構成」などの手順を踏まえつつ、「教課審の審議のまとめ」、「新学習指導要領の目標と内容」を考慮して作成したものである。

基本課題・具体課題からみた社会認識の内容と系統

新学習指導要領に示されている社会認識の内容を、基本課題・具体課題からみたときにどのような構成になっているのかを整理したものである。この課題をもとに、学年内・学年間で関連を図る内容を考慮し、課題単元の構想をしていく。総合学習を実践するにあたって、社会科の内容を統合しようとするときの参考ともなる。自校の総合学習がどのような教育課題の解決を目指しているかに応じて、そこに組み入れる社会科の内容をどうとらえればよいかが分かるよう工夫している。

基本課題からみた 厳選による教材の再構成

基本課題・具体課題とのかかわりの上で3～6年生の教材配列、単元づくりをどうするかを表したものである。社会の変化を見通した教材開発の視点と、これまで社会科の教材を構成する上で軸となってきたものをもとにした、基本課題・具体課題から、教材をどうみかを一覧できるような表にしているところに特徴がある。

社会科単元基底案 課題単元・教材単元の概要

単元名一覧に示されたそれぞれについて、その概要を記している。大枠を示すことで、各地域、学校で創意工夫して実践できるようにしている。すでに述べた基本課題・具体課題からみた目標を示しているところに特徴がある。

社会科基底単元 一課題単元と教材単元による一【単元名一覧】

3年生

I 課題単元	「まちをたんけんして、人びとのくらしをさぐろう」 ・市町の地形、土地利用、交通、公共施設を絵地図にする ・他地域の友達と絵地図を交換する ・いろいろなまちのくらしがあることを探る
II 地域選択	「まちのくらしをつくるしごとと、売るしごとからしらべてくらべよう」 ・わたしたちのくらしとものをつくるしごとをしらべよう 課題単元として実践する学校と教材単元として実践する学校との交流によって展開 ・わたしたちのくらしと売るしごとをしらべよう 課題単元として実践する学校と教材単元として実践する学校との交流によって展開
III 課題単元	「まちのようすやくらしがかわったことを絵地図にしよう」 ・「古くから残る道具、それを使っていたころのくらし」と「地域のようすが変わったこと」 ・昔から変わらないもので、残されているもの ・くらしをよくするよう変えた人物、守ってきた人物

4年生

I 課題単元	「わたしたちのくらしを守るしごとのようすを絵図にして調べよう」 ・くらしの安全を守るしごと（交通事故・火災） ・環境を守るしごと（廃棄物・下水）
II 課題単元	「わたしたちのくらしを高めた人たちのはたらきをしらべて流れ図にしよう」 ・くらしを高めるしごと（上水道） ・水を求めてきた先人の努力
III 課題単元・教材単元	「県のようすを調べ、他の土地とくらべて、よさをイラストマップにまとめよう」 ・県の特色ある地域の調べ（含 伝統的な技術を生かした生産） ・他地域の特色あるまちづくりからみた県の特色 ・地図の見方・読み方、資料の見方・読み方（教材単元として展開）

5年生

I 課題単元	「スーパーマーケットから食料生産のようすを調べよう」 ・教材単元「わたしたちの国土の地図を開いて、人々のくらしを調べよう」を単元の中に組み入れて実践（環境【国土保全・森林の働き】、地形、生産と交通【人口】、土地利用） ・生産地と消費地を結ぶ運輸の働きを入れて
II 地域選択	「商店街の品物から工業製品の生産のようすを調べよう」 ・教材単元「わたしたちの国土の地図を開いて、人々のくらしを調べよう」を単元の中に組み入れて実践（環境、地形、生産と交通【人口】、土地利用） ・工業生産を支える貿易や運輸の働きを入れて
III 課題単元	「香川の産業を支えている職人技を調べ、新聞にして情報発信しよう」 ・「新聞づくりなどの体験的な活動と産業学習のまとめ」を通信業の学習に統合して

6年生

I 課題単元	「地方史から出発して、日本の歴史を調べ、年表にしよう」 ・地域に残る文化財や先人とのつながりのある歴史上の人物や文化遺産と結んで、歴史に対する興味をふくらます ・我が国の歴史に残る先人や文化財から選んで、自分の生き方とつないで考え、友達と交流して年表にする
II 教材単元→課題単元	「瀬戸大橋（例）ができるまでと、できてからを調べ、政治とのかかわりの新聞にし、討論しよう」
III 教材単元→課題単元	「世界の中の日本人としての生き方を論文にしよう」 ・日本と深く結びつく国々と人々のくらしの情報を集める ・情報を整理して、地球環境と世界平和についての論説文を書く

基本課題からみた 厳選による教材の再構成 (表中 課…課題単位 教…教材単位)

		5 年		
基本課題	具体課題	教材の再構成による厳選プラン	新指導要領からみて	解 説
世界の中の日本人	国際関係と平和の確立			◆について ○ この単元は、教科書の教材配列では、第4学年の「各地のくらしとわたしたちの国土」にある内容を基盤としている。
地球環境にやさしく	生命財産の保護・保全			
	環境の保護・保全	◆私たちの国土の地図を開いて、人々のくらしを調べよう ・環境 ・地形と気候 ・生産と交通 ・土地利用 ・気候条件からみて特色ある地域の人々の生活	教 人口や資源の分布などに関する事項は、中学校へ移行する。地図その他の資料を活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考える。	・基本図や資料をもとに、環境、地形、人口分布、生産の全国的な傾向や問題点をつかむことをねらいとする。この単元で出てくる視点を教材単位としてⅠ、Ⅱの中に組み込んで実践する。
くらしをひろく生産と消費	生活圏の広がり与其他地域とのかかわり			Ⅰ・Ⅱについて ○ 農業・工業にとどまらず、運輸通信との関連を図った再構成とする。流通や情報の働きに目を向けつつ、領域を越えた課題単位にする。
	生産・流通・消費のしくみと情報	Ⅰ スーパーマーケットから農業生産のようすを調べよう Ⅱ 商店街の品物から工業製品の生産のようすをしらべよう	課 生産地と消費地を結ぶ運輸の働きについて扱う。 課 工業生産を支える貿易や運輸の働きについて扱う。	Ⅲについて ○ Ⅰ、Ⅱで学習した産業を支える人々の職人技に焦点をあて情報発信する。情報の正しい収集や活用の仕方、伝達の方法を身に付けることの大切さを、実践を通して気づく場とする。その過程に新聞社の情報と国民生活とのかかわりや影響について学ぶ場を位置づける。
	地域環境と人々の生活			
地方からの文化発信	人権の確立と民主政治			
	社会の発展と人間の歩み	Ⅲ 香川の産業を支えている職人技を調べ、新聞にして情報発信しよう	課 技術を生かした内容	

～社会科基底単元の構想 (香川県版) より抜粋～

基本課題・具体課題から見た社会認識の内容と系統

基本課題	地球環境にやさしく	具体課題	環境の保護・保全
------	-----------	------	----------

(社会認識の内容)

学年	地理的内容	歴史的内容	公民的内容
3年	○地域の人々の生活は、自然環境と深い関係がある。	○自分たちの市や町を中心とした地域の自然や社会環境の移り変わりや生活の変化	○地域の人々は、協力して生活の向上や住みよい環境づくりに努力している。
4年	○飲料水等の確保の対策や事業は地域の健康な生活の維持と向上に役立っている。森林やダムはその点で重要である。	○廃棄物の量や質が変化してきている。また、処理の方法も変わってきている。	○廃棄物の処理についての対策や事業は、地域の健康な生活の維持と向上に役立っている
5年	○国土の保全や水資源の涵養などのために森林資源が大切である。その育成や保護が大切である。	○公害の防止にあたって、工場・国・地方公共団体が対策を進めてきた。	○生活環境を快適にし、国民の健康を保護するため、公害の防止がきわめて大切である。 (具体事例：大気汚染、水質の汚濁)
6年	○環境破壊は自国のみにとどまらず、国境を越えて進行しており、各国で環境の保護に努めることが肝要である。	○地球温暖化防止などについては各国政府・国際団体が会議を開き、計画を立てて、地球規模で対策を進めてきている。	○環境の保護保全のために国際連合は大きな役割を果たしている。我が国も国際社会の平和と進展のために、果たさなければならない重い責任と義務がある。

(教育課題からみた解説)

具体課題「環境の保護・保全」を通して解決を図る教育課題は「環境」である。本具体課題は、主に自然環境を対象とする。環境の問題は国内にとどまらず、地球環境の危機としてとらえなければならない現状となっている。学校教育では、かけがえのない国土や地球の環境に目を向け、人間と自然が共存していくために具体的な行動をとる子どもの育成が望まれる。

それぞれの地域の自然条件や様子を調べることで、子どもたちは自然の美しさや大切さに気づくであろう。また、日本の国土そして地球全体の自然の様子やそれに合わせた人間の営みを知ることにより、自然破壊の恐ろしさと、環境の保護・保全の大切さについて学んでいくと考える。

さらに環境との調和を求めて、自然と共に生きようとしてきた、先人の長い間の工夫や努力のあとを探り、自分たちの生活の背景や今後のあり方を地球規模で考えることをここでは目指している。

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

社会科単元基底案 課題単元・教材単元の概要

課題単元

4年

わたしたちのくらしを高めた人たちのはたらきを調べて流れ図にしよう

主張点

私たちの郷土は、先人の水を求め、大切に活用し開発してきた業績に支えられ現在に至っている。水を求めた開発の歴史と人物の働きを地域の移り変わりの中に位置づけ調べていく。今の豊かで住みよいくらしを支える水を生み出す過程と地域の願いを一体として扱うことが、今の自分のくらしと水のかかわりを見つめ直すことにつながる。水不足を克服する地域の課題の明確化、水源確保に協力してくれる他地域への感謝など、自分の地域の水道の仕組みの理解を超える、香川ならではの地域性を生かした課題単元の構想である。

教育課題から見た社会認識

- 香川県は雨が少なく、水を安定して得たいという願いの実現のために昔から多くの人々が知恵をはたらかせ、努力してきた
- 香川用水の開通や、大型ダムの建設などによって水事情が好転してきた結果、人々の水に対する意識が薄らいでおり、給水量が増えても使用量は増加の一途をたどり、新たな水源を確保しなければならないという悪循環を生んでいる
- 我々も限られた少ない水を有効に使ってきた先人に学び、現在の時代にあった水の有効利用の方法について考えていく必要がある。

単元の概要

学 習 方 法	学 習 内 容
1 地域を歩き、水に関係する事物を調べる。	○地域には、ため池や用水路、新田、香川用水など人がつくった水に関係するものがたくさんある。
2 調べた事物の移り変わりを年表に表現する。	○香川県は雨が少なく昔から水不足で苦しんできた。
地域の水を求めてきた歴史を流れ図を入れた絵年表にまとめよう	○昔の人々は、地形や水の特性を生かして、用水路をつくってきた。水を無駄なく有効に分配するために、水を共同で管理してきた。
3 地域の代表的な水に関する開発と、人の働きを調べ、絵図や模型などにまとめる。	○水を確保するために、西嶋八兵衛（例）によってため池の築造や改修が行われた。
4 今の豊かな水が生み出されるまでを調べ、流れ図にまとめる。	○水を安定供給するために香川用水がつくられた。用水の運用にあたっては広く他地域の協力を得ている。
5 豊かな水を維持するための、他地域の森林を育てる活動を知り今のくらしをふりかえる。	○水がわたしたちの家に届くまでには、多くの人々の工夫や努力がある。上水道はわたしたちの健康な生活にとってなくてはならないものである。
6 水利用に対する自分の考えを絵年表の「これから」の部分に付け加え、絵年表を完成させる。	○水を安定的に得るため、上流部では森林を守る活動が行われている。
	○水道が普及してから生活様式が変化し、多くの水を使うようになってきた。
	○一人一人が、水が有限で貴重な資源であると理解する必要がある。先人の知恵、他地域、外国の取り組みに学び、水を有効に利用する方法を考えていかなければならない。

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

本部会では、授業に「ゆとり」をもって問題解決的な学習を展開し、集団の中で個を育てるという立場から、いじめ対策などにも心した、個に応じた授業を試みてきた。その授業改造の視点は、

- である。

豊かでたくましく生きる人間づくりを求める上での、「真の学力の構造」を踏まえ、これからの社会科学学習では、学習論としてどのような理論と実践を展開し、「社会科の基礎・基本からカリキュラムを編成する」方策とするのか。これまでの研究の成果からその核となる部分について述べておきたい。

新指導要領で示された、「観察や調査・見学、体験などの具体的な活動やそれに基づく表現活動をいっそう展開すること」を受け、社会科学習の基軸をこうした活動におくとともに、そこから自ら見いだした課題をさらに深めるようにしたい。つまり、「子どもの表現物から課題を見つける」、言い換えると、「子どもの表現・反応を教材化」して学習を展開するのである。そのことで、教師が教材を提示する、言い換えると外発的な動機付けにより始まる学習から脱却したいのである。

本部会では、下に掲げる「四つの調べ方法」と「多様な表現方法」を組み合わせる具体的な活動とそれに基づく表現活動を構想している。しかし、表現が単なる模倣や学習したことのまとめに終わってしまったのでは、「思考力」を育成することにはつながらない。表現したものの操作や再構成などの活動を学習過程に組み込んだり、学習内容やその単元で育成したい思考力に応じた効果的な表現方法を見極めたりして、学習計画を立てることを大切にしたい。

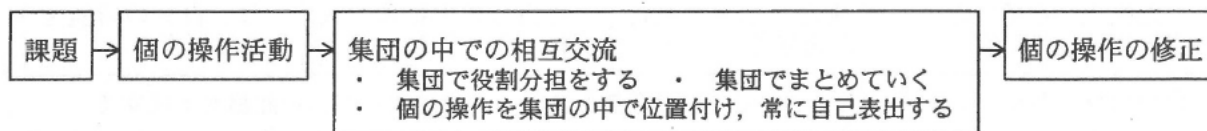
調べ 方法	実物調べ	簡便調べ	思い出し調べ	ひらめき調べ
主な 特質・ 特色	生の現場で、実物にあたる調べであり、直観・見学・体験により感覚的・体験的に事実をつかむ。	意識的・目的的な調べであり、事実調査に調査がない。あくまで意識や目録にあたる事実をつかむ。	「つまり」「まじ」と調べる側の論理に基づく調べであり、事実調査や推察とのつながりをつかむ。	意識的な調べでは解明できない。新しい見識から、新しい事実をひきよめるものではないものの調べであり、事実と事実の関を解めるものをつかむ。
	＜調べ問題の基本型＞ 「……実物にあたり」	＜調べ問題の基本型＞ 「……をきかしてみよう」	＜調べ問題の基本型＞ 「つながりを調べよう」	＜調べ問題の基本型＞ 「別の点から調ろう」

	具 体 範 疇				
類型	題 名	映 画	回 展	演 講	配 件
主 なる活動内容	制作化	映画	しく今展	絵と文	色カード
	人形劇づくり	文庫模型	義経展	映画	即カード等
	展づくり	絵地圖	設計部	コンピュータ操作	
	役割发现	版芝居	構成部等		
	こっこ活動等	かるた等		舞劇 文章演劇等	

「集団の中での個が生きる活動」は、新社会科が求める人間づくりを進める上で、ぜひともその学習方法の開発が求められるポイントである。このことの背景には、最近の心理学研究の成果がある。低学年における「個の確立」を踏まえ、中学年の発達課題「活動性」に基づく「仲間づくり」が可能となるという従来の発達観は、誤りではないかといわれている。同心円的に個から集団へいくのではなく、小さいときから集団を意識し、その中で個が生きていく、個がかかわっていくことが大切なのである。

授業の中で主体的な活動を通した友達との相互交流を一層豊かにする。その中で友達と一緒に何かをやり遂げようとし、そこに責任をもとうとする気持ちや我慢する心が育っていく。そういった意味で、集団と個のかかわりから一人一人の責任を明確にし、集団に果たしている役割の自覚をもち、個の活動と集団の活動が互いに影響を与えるような交流を組織する。このことが真の「個性重視の教育」だと考えている。

「それぞれの考え方・感じ方を分かり合い支え合う交流」、「個と個が互いに支え合い、理解し、尊重し合い、集団に寄与していく交流」を実現するための要件を次のようにまとめ、授業の基軸としていきたい。



(3) 発問中心の授業の改善

新指導要領が示す「考える」の重視が、「教師の発問から」を中心とするのではなく、自分の表現物を操作しつつ思考を深めていくことで具現化されることが重要である。

そのために大切にしてきたことの一つ目は、操作しつつ思考を深めていくことのできる表現物を、一人一人がもっていることである。子どもが意欲をもち、個の能力に応じた取り組みができるより具象性のある教材としての「学習材」をもとに学習が進められるようにする。

二つ目は、「思考」が成立するための「操作」を表現とのかかわりの上で位置づけることである。思考とは、問題を解決していくための情報処理の働きである。多様な情報を操作していくことが、思考力を育てることにつながる。具体的には、三つの操作が絡み合って思考が成立すると考え実践していきたい。

類別思考 (くらべる)		関係思考 (つなぐ)			条件思考 (かえる)		
分析	比較	因果	結合	総合	適応	構想	観点変更
事象を構成する因子を洗い出し、因子ごとに事象の特質を考 える。	二つの事象を比較して、異同を 考える。	事象間の原因—結果の関係を考 える。	関係している事象間のつながり を考える。	分析した二つ以上の因子をつな いで、新しい概念を考える。	事象に含まれている因子を他の 事象にあてはめることにより、 認識を深化し、拡充する思考で ある。	ひらめき思考、創造的な思考で あり、事実を組み立てながら、 見えないものを発見したり全体 像を描いていく。	見方を変えることによって、因 子の意味をとらえたり、二つの 事象間の関係を発見する。

(4) 人間形成の学習論に立つ授業過程の開発 ～自己実現を求める自分を創る～

これまで、人間づくり・人格形成を本来的な目的として授業の実践がなされてきた。しかし、その授業過程を支える原則は、「学習内容をどう深め、広げるか」という内容論と「どのように分かり・できるか」という認識論であった。

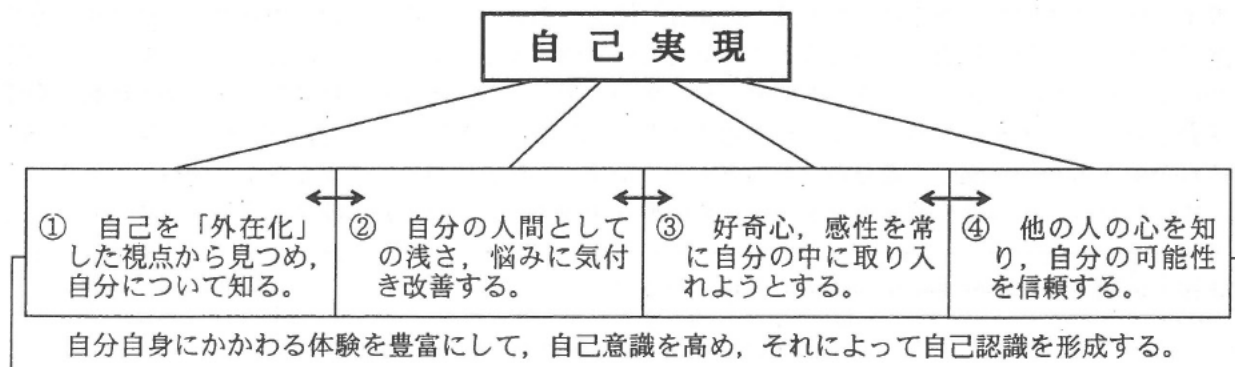
今の子どもたちを取り巻く諸問題を念頭に置いたとき、真の人間づくりをどう図るかという課題に「正面から取り組んだ学習論」と、そこに立つ授業過程の開発が急務である。こう考えたとき、従来の自己学習能力の育成を越えた要件を重視する必要がでてくる。

自分自身と対話しながら、自分の弱いところをカバーし、得意なところをみつけてよさを生かす。そんな自分を支え、一歩ずつ先に進んでいく。自分の可能性を長い見通しの中で開花実現するために、理想的自己のイメージをふくらませ、その方向に自分自身を少しずつ形成する努力を積み重ねて内面の中に生き方・在り方に関する一貫した原理・原則を作り上げる。言い換えると「自己実現を求める自分を創る」ということになろう。単元展開の流れの中に、さらにそこで繰り広げられる1時間の授業過程の中に、個の自己形成、自己実現の力を高めるための学びの場を設定するのである。

今後、授業の中に組み入れていきたい「自己実現の過程」を以下に示しておく。

① 自己実現の要因

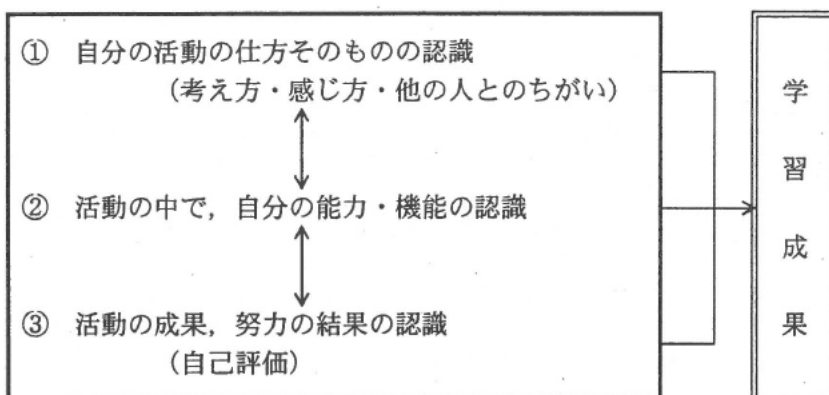
自己実現とは、自分自身に対して働きかけ、それまでになかった何かを、自分自身の上に実現していくことである。そして、そうした何かの実現は、価値的なものであり、人間としての成長・発達の達成として考えられるものでなくてはならない。具体的な授業の場面に置き換えると「どれだけ1時間の始めと終わり、人間的成長ができたのかが評価される。何が分かったかとともに、どういう自分について、深く認識できるようになったかを見つめる。」ことである。そういった具体的な場面を念頭に置くと、自己実現の要因は、次の四つとなろう。



② 自己実現と授業過程

従来の過程では、授業の最後に学習の成果をにらんで、「自己評価」という形で自分への省察が位置付けてきた。これからは、授業過程の折にふれ、自分の「実感・納得・本音」に気付き、自分自身の見方・考え方を暗黙のうちに方向付けている内面の土台について理解できるようにしていきたい。

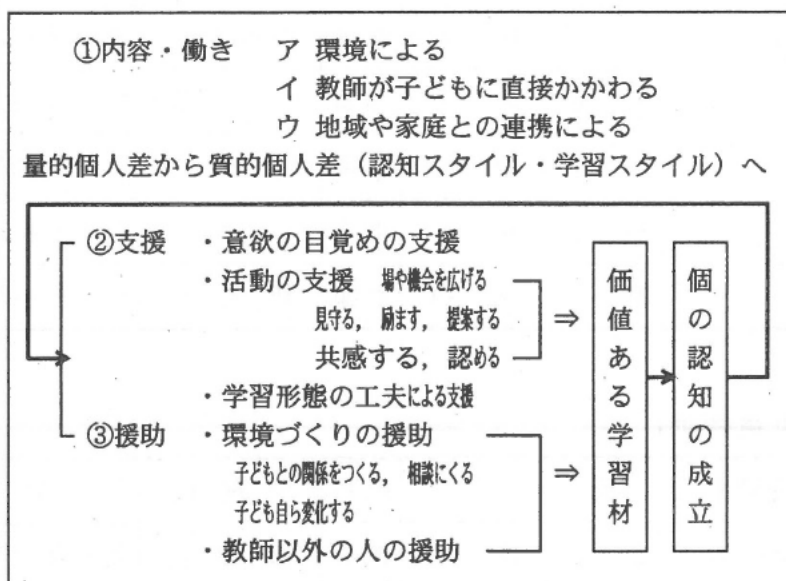
そのために、①～③を学年の発達に応じ、授業過程に組み入れる。



(5) 豊かにたくましく生きる人間づくりを求める教師の支援・援助活動

教師の支援・援助というと、すぐに児童に直接助言を与えることだと考えがちである。確かに教師の支援・援助は大きな役割を占めている。ただ、支援・援助活動は、他の児童の相互交流の場を設定したり、環境づくりを行ったりするような間接的なものも含めて幅広いものととらえ、授業で具現化を図ってきた。

このような支援・援助をもとにして、価値ある学習材を媒介にして、自分のよさや不十分な点を友達の学びや、学習環境の中から見いだしていく。与えられるのを待つのではなく、自らが求めていく子どもの学びの姿を求めたい。



【本研究会の研究実践の歩みを示す図書】

新学力観に立つ社会科授業

—「問い」と「論証」の調べ学習—

香川県小学校社会科教育研究会 著 明治図書

個が生きる認知過程の探究

—真の学力形成を目指す教育課程—

香川大学教育学部附属高松小学校 著 明治図書

新教育課程の構想と実践

—総合学習・新社会科学習の展開—

香川県小学校社会科教育研究会 著 明治図書

社会科基底単元の構想

—内容の厳選と課題単位による展開—

香川県小学校社会科教育研究会 社会科基底単元作成委員会 著

平成13年度 郡市社研役員名簿

【高松社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	吉 本 正 隆	校長	古高松小	高・高松町 3 9 8	087-841-9204
副会長	関 根 建 一	校長	新塩屋町小	高・末広町 5	087-851-2011
	植 松 勝	副校長	附属高松小	高・番町 5 - 1 - 5 5	087-861-7108
庶 務	南 原 志 伸	教諭	木 太 小	高・木太町 3 4 8 0 - 1	087-861-6337
	上 井 嘉	教諭	亀 阜 小	高・亀岡町 1 0 - 1	087-861-2013
	大 嶋 和 彦	教諭	鶴 尾 小	高・松並町 6 3 6 - 1	087-867-2564
会 計	池 田 理 恵	教諭	四番丁小	高・番町 1 - 5 - 1	087-851-8390
研究部	池 田 理 恵	教諭	四番丁小	高・番町 1 - 5 - 1	087-851-8390
	市 原 茂 幹	教諭	亀 阜 小	高・亀岡町 1 0 - 1	087-861-2013
	稲 田 耕 一	教諭	中 央 小	高・松縄町 8 0 7 - 1	087-866-2938
	葛 西 秀 樹	教諭	鶴 尾 小	高・松並町 6 3 6 - 1	087-867-2564

【丸亀社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	金 山 達 夫	校長	郡 家 小	丸・郡家町 7 9 0 - 1	0877-28-8401
副会長	香 川 佳 和	教頭	郡 家 小	丸・郡家町 7 9 0 - 1	0877-28-8401
庶 務	久 保 山 学	教諭	城 西 小	丸・六番丁 1 2	0877-22-9267
会 計	多 田 明 広	教諭	城 南 小	丸・田村町 9 7 3	0877-24-6177
研究部	山 野 正 登	教諭	城 南 小	丸・田村町 9 7 3	0877-24-6177
	池 内 右 典	教諭	郡 家 小	丸・郡家町 7 9 0 - 1	0877-28-8401
	香 川 浩 子	教諭	城 南 小	丸・田村町 9 7 3	0877-24-6177

【坂出社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	大 前 正 昭	校長	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
副会長	木 本 珠 城	校長	川 津 小	坂・川津町3093-1	0877-46-3884
	廣 田 秀 雄	校長	金 山 小	坂・谷町3-1-23	0877-46-2329
庶 務 (会計)	田 井 敏 之	教諭	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
	野 村 亮 子	教諭	西 部 小	坂・白金町1-3-7	0877-46-2149
	高 尾 久美子	教諭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
研究部	吉 田 和 弘	教諭	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
	大 西 浩 史	教諭	川 津 小	坂・川津町3093-1	0877-46-3884
	白 川 豊 浩	教諭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
	田 中 秀 年	教諭	西 庄 小	坂・西庄町524	0877-46-2662

【小豆社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	日 向 光 徳	校長	戸 形 小	小・土庄町甲3417	0879-62-0108
副会長	木 村 恭 之	教頭	湊 崎 小	小・土庄町湊崎甲1256	0879-62-0072
	越 智 久 功	教頭	大 部 小	小・土庄町大部甲1975	0879-67-2120
庶 務	役 重 和 雅	教諭	安 田 小	小・内海町安田甲472-1	0879-82-2012
会 計					
研究部	林 宗 利	教諭	土 庄 小	小・土庄町甲657-7	0879-62-0068
	青 木 隆 明	教諭	福 田 小	小・内海町福田甲718-1	0879-84-2023
	羽 座 則 史	教諭	星 城 小	小・内海町草壁本町632-1	0879-82-2011

【大川社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	八 木 育 夫	校長	多 和 小	大・長尾町多和字助光東30-1	0879-56-2002
副会長	古 市 聖 治	校長	長 尾 小	大・長尾町東901-1	0879-52-3181
	徳 田 二三男	校長	石 田 小	大・寒川町石田東甲425	0879-43-2006
	高 橋 英 武	校長	造 田 小	大・長尾町造田是弘688-1	0879-52-2141
	小 倉 健 治	校長	小 田 小	大・志度町大字小田1741	087-896-0066
庶 務	三 井 重 彰	教頭	志 度 小	大・志度町大字志度727	087-894-0041
	高 田 宏 隆	教諭	福 栄 小	大・白鳥町与田山351-1	0879-27-2323
	白 澤 一 修	教諭	小 田 小	大・志度町大字小田1741	087-896-0066
会 計	永 坂 邦 彦	教諭	長 尾 小	大・長尾町東901-1	0879-52-3181
研究部	沖 肅 二	教諭	長 尾 小	大・長尾町東901-1	0879-52-3181
	六 車 浩	教諭	三 本 松 小	大・大内町三本松862-1	0879-25-2664
	永 坂 邦 彦	教諭	長 尾 小	大・長尾町東901-1	0879-52-3181

【木田社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	藤 原 政 志	校長	神 山 小	木・三木町奥山987	087-899-0254
副会長	宮 脇 勝 美	教頭	庵 治 小	木・庵治町790-1	087-871-2581
庶 務	田 岡 直 樹	教諭	平 井 小	木・三木町平木710-1	087-898-0713
会 計	藤 岡 正 樹	教諭	白 山 小	木・三木町下高岡352-1	087-898-0257
研究部	泉 聡	教諭	牟 礼 北 小	木・牟礼町牟礼2900-1	087-845-5742
	黒 田 規 代	教諭	牟 礼 北 小	木・牟礼町牟礼2900-1	087-845-5742
	香 西 幸 代	教諭	氷 上 小	木・三木町氷上2845	087-898-0710
	小 山 順 子	教諭	庵 治 小	木・庵治町790-1	087-871-2581

【香川社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	鴨 井 俊 徳	校長	直 島 小	香・直島町1600	087-892-3007
副会長	野 崎 恭 一	教頭	香 南 小	香・香南町横井1008	087-879-2269
庶 務	小 原 敏 昭	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野3088	087-889-0215
会 計	川 村 千 寿	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野3088	087-889-0215
研究部	小比賀 節 子	教諭	大 野 小	香・香川町大野1045-1	087-885-2165
	喜 岡 永 光	教諭	川 東 小	香・香川町川東上1865-8	087-879-2012

【綾歌社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	松 下 繁 美	校長	岡 田 小	綾・綾歌町岡田下217	0877-86-3004
副会長	竹 下 和 男	校長	滝 宮 小	綾・綾南町滝宮1100	087-876-1183
	坂 東 博 文	教頭	国分寺南部小	綾・国分寺町福家甲3005	087-874-1160
	上 原 公 子	教頭	西 分 小	綾・綾上町西分1208	087-878-2013
庶 務	波 多 誠	教諭	宇多津北小	綾・宇多津町浜八番丁115	0877-49-2000
	真 井 孝 征	教諭	岡 田 小	綾・綾歌町岡田下217	0877-86-3004
	田 中 直 樹	教諭	国分寺南部小	綾・国分寺町福家甲3005	087-874-1160
会 計	馬 場 直 明	教諭	富 熊 小	綾・綾歌町富熊1227	0877-86-2010
研究部	宇 山 知 昌	教諭	西 分 南 小	綾・綾上町西分2213	087-878-2703
	福 家 光 洋	教諭	昭 和 小	綾・綾南町畑田2381	087-877-0519
	高 吉 直 之	教諭	粉 所 小	綾・綾上町粉所西甲2060	087-878-2312

【仲善社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	山 下 清 明	校長	満濃南小	仲・満濃町大字吉野74	0877-79-2110
副会長	水 卜 由 文	教頭	満濃南小	仲・満濃町大字吉野74	0877-79-2110
庶 務	山 田 泰 二	教諭	豊 原 小	仲・多度津町南鴨704	0877-32-2050
	森 井 信 一	教諭	四 箇 小	仲・多度津町大字三井433-1	0877-32-2517
会 計	谷 口 時 美	教諭	四 条 小	仲・満濃町四條728	0877-73-5514
研究部	森 昭 二	教諭	善・東部小	善・稲木町450-1	0877-62-0703
	島 田 英 夫	教諭	善・南部小	善・生野町2990-1	0877-62-0702
	横 川 正 信	教諭	仲 南 西 小	仲・仲南町十郷追上下大口20	0877-77-2310

【三豊社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	大 西 孝 典	校長	豊 浜 小	三・豊浜町和田浜1000	0875-52-2029
副会長	西 谷 則 一	校長	上 高 野 小	三・豊中町上高野2384	0875-62-2064
	各 務 清	校長	豊 田 小	観・新田町1413	0875-27-6303
庶 務	白 杵 優	教諭	杵 田 小	観・杵田町乙1000-1	0875-25-3621
	高 橋 克 佳	教諭	大 野 原 小	三・大野原町大野原1905	0875-54-2029
会 計	白 杵 優	教諭	杵 田 小	観・杵田町乙1000-1	0875-25-3621
研究部	安 藤 通	教諭	上 高 野 小	三・豊中町上高野2384	0875-62-2064
	高 橋 克 佳	教諭	大 野 原 小	三・大野原町大野原1905	0875-54-2029
	岩 倉 隆 視	教諭	二ノ宮小	三・高瀬町佐股甲1497-1	0875-74-6302
	岸 上 也 寸志	教諭	観音寺南小	観・観音寺町甲1186-2	0875-25-4675

平成13年度 各部代表者名簿

【高松社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 木 太 小	南 原 志 伸	6 年
	② 築 地 小	福 家 親 夫	5 年
	③ 亀 阜 小	上 井 嘉	6 年
研究会	① 四 番 丁 小	池 田 理 恵	6 年
	② 亀 阜 小	市 原 茂 幹	3 年
	③ 鶴 尾 小	大 嶋 和 彦	6 年
基礎・テスト部	① 高 松 中 央 小	稲 田 耕 一	6 年
	② 屋 島 西 小	黒 川 浩 一	3 年
	③ 鶴 尾 小	葛 西 秀 樹	3 年

【丸亀社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 郡 家 小	樋 口 昌 樹	6 年
	② 城 乾 小	高 木 京 子	2 年
	③ 城 辰 小	中 西 昇	障 害 児
研究部	① 城 南 小	山 野 正 登	少 人 数
	② 郡 家 小	池 内 右 典	3 年
	③ 城 南 小	香 川 浩 子	5 年
基礎・テスト部	① 城 東 小	梅 谷 旬	4 年
	② 城 北 小	石 川 裕 之	5 年
	③ 城 坤 小	平 澤 昌 司	6 年

【坂出社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 東 部 小	田 井 敏 之	少 人 数
	② 西 部 小	野 村 亮 子	障 害 児
	③ 中 央 小	高 尾 久 美 子	障 害 児
研 究 部	① 東 部 小	吉 田 和 弘	5 年
	② 川 津 小	大 西 浩 史	6 年
	③ 中 央 小	白 川 豊 浩	6 年
基 礎・ テ ス ト 部	① 西 部 小	岡 本 敏 英	2 年
	② 府 中 小	福 家 寿 夫	3 年
	③		

【小豆社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 星 城 小	羽 座 則 史	
	② 北 浦 小	蘆 原 秀 稔	4 年
	③		
研 究 部	① 土 庄 小	林 宗 利	3 年
	② 土 庄 小	塩 見 強	4 年
	③		
基 礎・ テ ス ト 部	① 福 田 小	青 木 隆 明	4 年
	②		
	③		

【大川社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 小 田 小	白 澤 一 修	3 年
	② 長 尾 小	永 坂 邦 彦	5 年
	③ 本 町 小	窪 田 史 子	6 年
研 究 部	① 長 尾 小	沖 肅 二	3 年
	② 三 本 松 小	六 車 浩	6 年
	③ 富 田 小	橋 本 義 人	5 年
基礎・テスト部	① 石 田 小	廣 瀬 強	5 年
	② 福 栄 小	高 田 宏 隆	6 年
	③ 志 度 小	梅 本 明 宏	5 年

【木田社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 牟 礼 小	磯 部 康 子	障 害 児
	② 平 井 小	前 田 宏 之	3 年
	③ 平 井 小	武 田 玲 子	4 年
研 究 部	① 牟 礼 北 小	黒 田 規 代	4 年
	② 氷 上 小	香 西 幸 代	1 年
	③ 庵 治 小	小 山 順 子	3 年
基礎・テスト部	① 氷 上 小	柴 原 照 子	6 年
	② 牟 礼 小	村 松 眞 弓	3 年
	③ 牟 礼 南 小	萬 谷 紀 子	4 年

【香川社研】

		学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	代 表 者	① 浅 野 小	小 原 敏 昭	3 年
		② 安 原 小	廣 田 和 子	2 年
		③ 香 南 小	古 田 真 由 美	3 年
研 究 部	代 表 者	① 大 野 小	小 比 賀 節 子	2 年
		② 川 東 小	喜 岡 永 光	6 年
		③ 直 島 小	大 奥 洋 介	3 年
基 礎 ・ テ ス ト 部	代 表 者	① 浅 野 小	川 村 千 寿	5 年
		② 川 東 小	宮 脇 好 美	5 年
		③ 塩 江 小	長 岡 伸 幸	3 年

【綾歌社研】

		学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会		① 西 分 南 小	宇 山 知 昌	4・5 年
		② 国 分 寺 南 部 小	田 中 直 樹	6 年
		③ 宇 多 津 北 小	波 多 誠	5 年
研 究 部		① 岡 田 小	真 井 孝 征	6 年
		② 昭 和 小	福 家 光 洋	6 年
		③ 粉 所 小	高 吉 直 之	2 年
基 礎 ・ テ ス ト 部		① 富 熊 小	馬 場 直 明	4 年
		② 岡 田 小	林 聖 士	5 年
		③ 山 田 小	青 木 弥 生	5 年

【仲善社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 白 方 小	亀 山 典 良	教 務
	② 満 農 南 小	高 橋 義 徳	障 害 児
	③		
研 究 部	① 東 部 小	森 昭 二	5 年
	② 南 部 小	島 田 英 夫	4 年
	③ 仲 南 西 小	横 川 正 信	6 年
基 礎・ テ ス ト 部	① 仲 南 北 小	高 家 和 彦	5 年
	② 南 部 小	島 田 英 夫	4 年
	③ 高 篠 小	吉 村 富 士 代	5 年

【三豊社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 二 ノ 宮 小	岩 倉 隆 視	5 年
	② 観 音 寺 南 小	岸 上 也 寸 志	4 年
	③ 柞 田 小	臼 杵 優	5 年
研 究 部	① 上 高 野 小	安 藤 通	6 年
	② 大 野 原 小	高 橋 克 佳	6 年
	③ 詫 間 小	赤 坂 光 敏	6 年
基 礎・ テ ス ト 部	① 高 室 小	三 崎 彰 夫	6 年
	② 観 音 寺 東 小	萬 亀 弘 吉	5 年
	③ 松 崎 小	石 川 博 健	障 害 児

平成13年度 香川県小学校社会科教育研究会名簿

高松市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	760-0012	瀬戸内町18-2	日 新 小	教頭	野 島 悟	087 861-5702	
2	760-0020	錦町2-14-1	二 番 丁 小	5	檜 原 一 宏	851-3741	
3	760-0006	亀岡町10-1	亀 阜 小	教頭	徳 田 仁 司	861-2013	
4	"	"	"	6	上 井 嘉	"	
5	"	"	"	3	市 原 茂 幹	"	
6	760-0017	番町1-5-1	四 番 丁 小	6	池 田 理 恵	851-8390	
7	760-0073	栗林町2-10-7	栗 林 小	6	橋 本 康 裕	861-3438	
8	"	"	"	5	青 木 明 子	"	
9	"	"	"	4	雨 山 幸 子	"	
10	"	"	"	3	高 木 恭 子	"	
11	"	"	"	障害	寺 島 幹 人	"	
12	760-0068	松島町2-14-5	松 島 小	4	安 倍 幸 則	861-4503	
13	760-0061	築地町14-1	築 地 小	教頭	藤 本 一 郎	831-7188	
14	"	"	"	5	福 家 親 夫	"	
15	760-0060	末広町5	新 塩 屋 町 小	校長	関 根 建 一	851-2011	
16	"	"	"	6	高 橋 洋 子	"	
17	"	"	"	6	佐 立 茂 樹	"	
18	761-8052	松並町636-1	鶴 尾 小	6	大 嶋 和 彦	867-2564	
19	"	"	"	6	日 下 浩 子	"	
20	"	"	"	3	葛 西 秀 樹	"	
21	"	"	"	T・T	田 邊 裕 一 朗	"	
22	760-0080	木太町3480-1	木 太 小	6	南 原 志 伸	861-6337	
23	"	"	"	T・T	佐々木 誠	"	
24	761-0104	高松町398	古 高 松 小	校長	吉 本 正 隆	841-9204	
25	"	"	"	5	岩 崎 正 敬	"	
26	"	"	"	5	熊 野 真 美	"	
27	761-0322	前田東町819-3	前 田 小	教頭	池 田 孝 徳	847-6562	
28	"	"	"	T・T	香 西 謙 二	"	
29	761-8078	仏生山町甲2461	仏 生 山 小	教頭	山 下 晃	889-0549	
30	761-8044	円座町1630-2	円 座 小	5	福 家 正 人	885-2542	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
31	761-0301	林町1108-1	林 小	6	井 上 泉	087 865-6250	
32	"	"	"	4	山 下 博	"	
33	"	"	"	3	白 川 顕 二	"	
34	761-8032	鶴市町374-1	弦 打 小	校長	林 靖 子	881-3523	
35	"	"	"	6	池 田 茂 樹	"	
36	761-0443	川島東町864-1	川 島 小	4	宇喜多 孝 明	848-0050	
37	"	"	"	3	守 屋 邦 江	"	
38	760-0079	松縄町807-1	中 央 小	教頭	藤 田 和 代	866-2938	
39	"	"	"	6	稲 田 耕 一	"	
40	761-0111	屋島東町942-1	屋 島 東 小	校長	古 沢 博 美	843-8402	
41	761-0113	屋島西町2469	屋 島 西 小	3	黒 川 浩 一	841-1063	
42	760-0017	番町5-1-55	附 属 高 松 小	副校長	植 松 勝	861-7108	
43	"	"	"	5	喜 多 文 彦	"	
44	"	"	"	5	日 下 哲 也	"	
45	"	"	"	5	三 木 省 二	"	
46	"	"	"	4	榎 貴 志	"	
47	"	"	"	3	亀 井 健 男	"	
48	"	"	"	1	寺 嶋 俊 秀	"	

丸亀市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	763-0033	中府町五丁目15-1	城 乾 小	2	高 木 京 子	0877 22-8158	
2	763-0051	今津町348	城 坤 小	3	吉 田 良 三	24-4705	
3	"	"	"	4	佐々木 美 華	"	
4	"	"	"	6	平 澤 昌 司	"	
5	"	"	"	教務	寒 川 英 樹	"	
6	763-0002	瓦町95	城 北 小	3	高 木 弘 信	24-4700	
7	"	"	"	5	石 川 裕 之	"	
8	763-0026	六番丁12	城 西 小	5	北 分 英 樹	22-9267	
9	"	"	"	6	久保山 学	"	
10	763-0071	田村町973	城 南 小	5	多 田 明 広	24-6177	
11	"	"	"	5	香 川 浩 子	"	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
12	763-0071	田村町973	城 南 小	少人数	山 野 正 登	0877 24-6177	
13	"	"	"	教務	氏 家 雅 子	"	
14	763-0081	土器町西五丁目113	城 東 小	4	梅 谷 旬	24-4703	
15	763-0091	川西町北151	城 辰 小	障害	中 西 昇	28-7401	
16	763-0093	郡家町790-1	郡 家 小	3	池 内 右 典	28-8401	
17	"	"	"	4	守 家 恵 子	"	
18	"	"	"	6	樋 口 昌 樹	"	
19	"	"	"	教頭	香 川 佳 和	"	
20	"	"	"	校長	金 山 達 夫	"	
21	763-0086	飯野町西分113	飯 野 小	専	吉 田 京 子	22-6019	
22	763-0108	広島町小手島2782	小 手 島 小	5・6	合 田 吉 宏	29-2751	

坂出市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	762-0042	白金町1-3-7	西 部 小	障害	野 村 亮 子	0877 46-2149	
2	"	"	"	2	岡 本 敏 英	"	
3	762-0043	寿町3-1-2	中 央 小	2	旅 田 敏 弘	46-2124	
4	"	"	"	障害	高 尾 久美子	"	
5	"	"	"	6	白 川 豊 浩	"	
6	"	"	"	内留	河 野 富 男	"	
7	762-0007	室町1-1-21	東 部 小	校長	大 前 正 昭	46-0234	
8	"	"	"	教頭	金 井 宏 諾	"	
9	"	"	"	障害	多田羅 洋 子	"	
10	"	"	"	少人数	田 井 敏 之	"	
11	"	"	"	5	吉 田 和 弘	"	
12	"	"	"	4	黒 川 大 介	"	
13	"	"	"	5	真 鍋 長 嗣	"	
14	762-0033	谷町3-1-23	金 山 小	校長	廣 田 秀 雄	46-2329	
15	"	"	"	2	丸 尾 ルミ子	"	
16	762-0021	西庄町524	西 庄 小	3	田 中 秀 年	46-2662	
17	762-0012	林田町2191	林 田 小	4	金 関 太 郎	47-0270	
18	762-0023	加茂町1099	加 茂 小	6	佐 藤 和 代	48-0601	
19	762-0024	府中町1193-3	府 中 小	5	香 川 和 美	48-0610	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
20	762-0024	府中町1193-3	府 中 小	5	福 家 寿 夫	0877 48-0610	
21	762-0025	川津町3093-1	川 津 小	校長	木 本 珠 城	46-3884	
22	"	"	"	3	丸 岡 小百合	"	
23	"	"	"	6	大 西 浩 史	"	
24	762-0067	瀬居町1490	瀬 居 小	教頭	亀 井 彰	46-9194	
25	762-0066	沙弥島152	沙 弥 小	教頭	山 地 正 子	45-6016	
26	762-0072	岩黒240	岩 黒 小	2・4	岡 野 雄太郎	43-0104	
27	762-0031	文京町2-4-2	附 坂 小	6	合 田 雅 気	46-2692	
28	"	"	"	4	佐 柳 仁	"	

小豆郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-4106	土庄町甲657-7	土 庄 小	3	林 宗 利	0879 62-0068	
2	"	"	"	4	塩 見 強	"	
3	"	"	"	5	湊 貴 康	"	
4	761-4115	土庄町甲3417	戸 形 小	校長	日 向 光 徳	62-0108	
5	"	"	"	4	向 永 和 資	"	
6	761-4121	土庄町湊崎甲1256	湊 崎 小	障害	福 井 健 文	62-0072	
7	"	"	"	教頭	木 村 恭 之	"	
8	761-4151	土庄町肥土山甲1735	大 鐸 小	6	樋 本 清 和	62-0712	
9	761-4145	土庄町大部甲1975	大 部 小	教頭	越 智 久 功	67-2120	
10	"	"	"	4	大 海 隆 志	"	
11	761-4143	土庄町見目甲1587	北 浦 小	4	蘆 原 秀 稔	65-2021	
12	761-4131	土庄町伊喜末381	四 海 小	4	脇 坂 敦	64-5051	
13	761-4301	池田町池田1760	池 田 小	3	中 野 美砂子	75-2222	
14	761-4432	内海町草壁本町632	星 城 小	教務	羽 座 則 史	82-2011	
15	"	"	"	5	河 田 祥 司	"	
16	761-4411	内海町安田甲472-1	安 田 小	同和	役 重 和 雅	82-2012	
17	761-4421	内海町苗羽甲1371-1	苗 羽 小	障害	高 畠 一 友	82-2013	
18	761-4402	内海町福田甲718-1	福 田 小	4	青 木 隆 明	84-2023	

大川郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	769-2903	引田町南野204-1	相 生 小	教頭	大 岡 眞 海	0879 33-3627	
2	769-2705	白鳥町白鳥525	白 鳥 小	校長	熊 田 正 美	25-2642	
3	769-2713	白鳥町与田山351-1	福 栄 小	6	高 田 宏 隆	27-2323	
4	769-2702	白鳥町松原167-1	本 町 小	6	窪 田 史 子	25-3064	
5	769-2601	大内町三本松862-1	三 本 松 小	6	六 車 浩	25-2664	
6	761-0901	大川町富田西2595-2	富 田 小	5	橋 本 義 人	43-2016	
7	769-2321	寒川町石田東甲425	石 田 小	校長	徳 田 二三男	43-2006	
8	"	"	"	教頭	穴 吹 眞 二	"	
9	"	"	"	5	廣 瀬 強	"	
10	769-2312	長尾町造田是弘688-1	造 田 小	校長	高 橋 英 武	52-2141	
11	769-2301	長尾町東901-1	長 尾 小	校長	古 市 聖 治	52-3181	
12	"	"	"	3	沖 肅 二	"	
13	"	"	"	5	永 坂 邦 彦	"	
14	769-2306	長尾町多和字助光東30-1	多 和 小	校長	八 木 育 夫	56-2002	
15	769-2101	志度町大字志度727	志 度 小	教頭	三 井 重 彰	087 894-0041	
16	"	"	"	5	梅 本 明 宏	"	
17	769-2103	志度町大字小田1741	小 田 小	校長	小 倉 健 治	896-0066	
18	"	"	"	3	白 澤 一 修	"	

木田郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-0122	牟礼町大町1560	牟 礼 小	障害	磯 部 康 子	087 845-9239	
2	"	"	"	3	村 松 眞 弓	"	
3	761-0612	三木町氷上2845	氷 上 小	6	柴 原 照 子	898-0710	
4	"	"	"	1	香 西 幸 代	"	
5	761-0122	牟礼町大町1115-1	牟 礼 南 小	4	萬 谷 紀 子	845-9324	
6	761-0130	庵治町790-1	庵 治 小	3	小 山 順 子	871-2581	
7	761-0121	牟礼町牟礼2900-1	牟 礼 北 小	専	泉 聡	845-5742	
8	"	"	"	4	黒 田 規 代	"	
9	761-0704	三木町下高岡352-1	白 山 小	5	小笠原 学	898-0257	
10	"	"	"	専	藤 岡 正 樹	"	
11	761-0702	三木町平木710-1	平 井 小	6	田 岡 直 樹	898-0713	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
12	761-0702	三木町平木710-1	平 井 小	3	前 田 宏 之	087 898-0713	
13	"	"	"	4	武 田 玲 子	"	
14	761-0822	三木町奥山987	神 山 小	校長	藤 原 政 志	899-0254	
15	761-0130	庵治町790-1	庵 治 小	教頭	宮 脇 勝 美	871-2581	

香川郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-3110	直島町1600	直 島 小	校長	鴨 井 俊 徳	087 892-3007	
2	761-1404	香南町横井1008	香 南 小	教頭	野 崎 恭 一	879-2269	
3	761-1502	塩江町安原下 第2号1684	安 原 小	2	廣 田 和 子	897-0008	
4	761-1612	塩江町安原上東365	塩 江 小	3	長 岡 伸 幸	893-0027	
5	761-1701	香川町大野1045-1	大 野 小	2	小比賀 節 子	885-2165	
6	"	"	"	4	黒 川 久美子	"	
7	"	"	"	置籍	野 土 裕 彦	"	
8	761-1703	香川町大字浅野3088	浅 野 小	3	小 原 敏 昭	889-0215	
9	"	"	"	4	桑 原 康 孝	"	
10	"	"	"	5	川 村 千 寿	"	
11	761-1706	香川町川東上1865-8	川 東 小	6	喜 岡 永 光	879-2012	
12	"	"	"	5	宮 脇 好 美	"	
13	761-1404	香南町横井1008	香 南 小	3	湯 浅 良 子	879-2269	
14	"	"	"	3	古 田 真由美	"	
15	761-3110	直島町1600	直 島 小	3	大 奥 洋 介	892-3007	

綾歌郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-2206	綾上町西分1208	西 分 小	5	北 村 顕 吾	087 878-2013	
2	"	"	"	教頭	上 原 公 子	"	
3	"	綾上町西分2213	西 分 南 小	4・5	宇 山 知 昌	878-2703	
4	761-2203	綾上町山田上甲1494-1	山 田 小	5	青 木 弥 生	878-2004	
5	761-2305	綾南町滝宮1100	滝 宮 小	校長	竹 下 和 男	876-1183	
6	"	"	"	6	小 谷 修	"	
7	761-2101	綾南町畑田2381	昭 和 小	4	丹 羽 枝里子	877-0519	
8	"	"	"	6	福 家 光 洋	"	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
9	761-2103	綾南町陶5878	陶 小	3	四 角 康 子	087 876-1182	
10	769-0101	国分寺町新居1880	国分寺北部小	4	鎌 野 智 子	874-1154	
11	"	"	"	6	西 尾 由 加	"	
12	769-0103	国分寺町福家甲3005	国分寺南部小	校長	山 崎 敏 和	874-1160	
13	"	"	"	教頭	坂 東 博 文	"	
14	"	"	"	6	田 中 直 樹	"	
15	"	"	"	6	平 野 希代子	"	
16	"	"	"	3	須 田 美佐子	"	
17	"	"	"	4	小 川 美 和	"	
18	"	"	"	3	早 瀬 良 子	"	
19	762-0082	飯山町川原1874	飯 山 北 小	3	氏 家 敏 文	0877 98-2020	
20	761-2407	綾歌町富熊1227	富 熊 小	4	馬 場 直 明	86-2010	
21	761-2402	綾歌町岡田下217	岡 田 小	校長	松 下 繁 美	86-3004	
22	"	"	"	5	林 聖 上	"	
23	"	"	"	3	西 村 道 代	"	
24	769-0208	宇多津町浜八番丁115	宇多津北小	6	福 家 三枝子	49-2000	
25	"	"	"	5	波 多 誠	"	
26	769-0210	宇多津町815	宇 多 津 小	5	森 昭	49-1820	
27	761-2402	綾歌町岡田下217	岡 田 小	6	真 井 孝 征	86-3004	
28	761-2202	綾上町粉所西甲2060	粉 所 小	2	高 吉 直 之	087 878-2312	

仲多度郡・善通寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	766-0013	満濃町東高篠139	高 篠 小	5	吉 村 富士代	0877 73-3842	
2	766-0021	満濃町四條728	四 条 小	3	谷 口 時 美	73-5514	
3	766-0023	満濃町吉野74	満 濃 南 小	校長	山 下 清 明	79-2110	
4	"	"	"	教頭	水 卜 由 文	"	
5	"	"	"	障害	高 橋 義 徳	"	
6	766-0201	琴南町造田1984-1	西 小	6	川 田 郁 子	85-2010	
7	769-0319	仲南町十郷追上下大口20	仲 南 西 小	6	横 川 正 信	77-2310	
8	769-0312	仲南町十郷宮田750-4	仲 南 北 小	校長	三 井 尚	75-4032	
9	"	"	"	5	高 家 和 彦	"	
10	766-0002	琴平町145-1	琴 平 小	教頭	片 井 功	73-2831	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
11	766-0006	琴平町上櫛梨26	象 郷 小	4	真 鍋 静 子	0877 73-2830	
12	764-0032	多度津町三井433-1	四 箇 小	6	森 井 信 一	32-2517	
13	764-0035	多度津町奥白方1142	白 方 小	教務	亀 山 典 良	32-3331	
14	764-0026	多度津町南鴨704	豊 原 小	5	吉 本 恭 子	32-2050	
15	"	"	"	5	山 田 泰 二	"	
16	"	"	"	4	豊 浦 辰 司	"	
17	764-0011	多度津町栄町三丁目1-9	多 度 津 小	5	坂 倉 徹	33-1616	
18	765-0013	善・文京町四丁目5-1	中 央 小	3	大 平 美智子	62-1616	
19	765-0053	善・生野町2990-1	南 部 小	4	島 田 英 夫	62-0702	
20	"	"	"	6	横 田 順 子	"	
21	765-0022	善・稲木町450-1	東 部 小	5	森 昭 二	62-0703	
22	765-0040	善・与北町1238	与 北 小	6	堀 金 伸 幸	62-0704	
23	765-0032	善・原田町306-1	竜 川 小	4	宮 川 美恵子	62-0705	
24	765-0073	善・中村町1575-2	筆 岡 小	3	村 主 彰 子	62-0706	

三豊郡・観音寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	769-1602	豊浜町大字和田浜1000	豊 浜 小	校長	大 西 孝 典	0875 52-2029	
2	"	"	"	3	近 藤 あけみ	"	
3	"	"	"	2	清 水 裕 子	"	
4	769-1614	大野原町大字萩原2354	萩 原 小	校長	渡 邊 重 忠	54-2079	
5	769-1611	大野原町大字 大野原1905番地	大 野 原 小	6	高 橋 克 佳	54-2029	
6	"	"	"	3	杉 本 友 徳	"	
7	768-0040	観・柞田町乙1000番地1	柞 田 小	5	臼 杵 優	25-3621	
8	768-0033	観・新田町1413番地	豊 田 小	校長	各 務 清	27-6303	
9	"	"	"	1	小 野 ひとみ	"	
10	768-0060	観・観音寺町甲1186番地2	観 音 寺 南 小	4	岸 上 也寸志	25-4675	
11	768-0002	観・高屋町1877番地1	高 室 小	6	三 崎 彰 夫	25-2661	
12	768-0060	観・観音寺町甲670-2	観 音 寺 東 小	5	萬 亀 弘 吉	25-2219	
13	768-0102	山本町大字天野 457番地1	大 野 小	教頭	山 内 さつき	63-2009	
14	768-0104	山本町大字神田 1259番地	神 田 小	5	宮 武 一 美	63-2193	
15	"	"	"	6	安 藤 雅 慶	"	
16	769-1504	豊中町上高野2384番地	上 高 野 小	校長	西 谷 則 一	62-2064	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
17	769-1504	豊中町上高野2384番地	上 高 野 小	6	安 藤 通	0875 62-2064	
18	769-1502	豊中町大字笠田 笠岡2191番地1	笠 田 小	校長	田 井 秀 典	62-2004	
19	767-0021	高瀬町大字佐股甲 1497-1	二 ノ 宮 小	5	岩 倉 隆 視	74-6302	
20	"	"	"	3	國 土 英 二	"	
21	767-0013	高瀬町大字下麻 1209番地	麻 小	校長	前 田 高 次	74-6237	
22	"	"	"	2	高 濱 淳 子	"	
23	"	"	"	5	篠 原 正 議	"	
24	769-1403	仁尾町大字仁尾丙 1736番地	仁 尾 小	6	小 西 寛	82-2049	
25	"	"	"	4	岡 田 明 子	"	
26	769-1101	詫間町大字詫間 2158番地	詫 間 小	4	赤 坂 光 敏	83-2858	
27	769-1104	詫間町大字大浜甲 1633番地1	大 浜 小	4	秋 元 一 秀	84-7359	
28	"	"	"	5	吉 田 匡 克	"	
29	769-1108	詫間町大字粟島 1506番地2	粟 島 小	教頭	安 藤 清 和	84-7012	
30	769-1102	詫間町大字松崎 722番地	松 崎 小	障害	石 川 博 健	83-2856	

